近現代詩

教材のねらい

1 選定の理由

室生犀星の「小景異情」の特に「その二」は、伝統的な七音、五音の音数律を生かし、「ふるさと」を詠んだ詩として人々に愛唱され親しまれてきた。萩原朔太郎「およぐひと」は、ひらがな表記の視覚的効果を加味した口語自由詩であり、主題の伝達ではなくイメージの表出を狙いとする。宮沢賢治の「永訣の朝」は、妹の臨終にあたり深い悲しみから生み出された祈りの言葉が、方言のリフレインを交えて、口語によるリズムを生み出している。茨木のり子の「汲む」は、目立って技巧的ではないが、奥深い思索を平易に言い表し、人生に対する洞察を印象的に伝えている。文体や技法のあり方はそれぞれ異なっているが、近代詩、現代詩の多角的な世界の一端をこれらの詩から捉えることができる。

2 指導のねらい

(1)詩の朗読により、リズムとイメージを喚起させ、味わう。
(2)それぞれの詩について、詩の言葉の持つ個性豊かな表現を味わう。
(3)内容・構成・表現・主題・動機について理解させ、根拠ある鑑賞のしかたを身につけさせる。
(4)時代的な表現と、時代を超えて伝わってくる抒情を味わう。

３　評価規準

学習指導要領との対応	〔知・技〕					〔思・判・表〕			
	(1)ア	(1)ウ	(2)ア	(2)エ	(2)カ	B(1)ア	B(1)イ	B(1)ウ	B(1)エ
評価規準例	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	我が国の言語文化の特質について理解している。 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。	時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めている。	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。	「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。	「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。 「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。
小景異情	○	○	○			○	○	○	○
およぐひと	○	○	○			○	○	○	○
永訣の朝	○	○	○	○		○	○	○	
【参考】人生の〈救い〉としての詩	○	○	○		○				
汲む	○	○	○	○		○	○	○	○

	B(1)オ	〔主体的に学習に取り組む態度〕
「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。		
進んで作品を、反復表現の効果に留意しながら読み味わい、学習課題に沿って、「ふるさと」と「みやこ」の関係について、作者の生きた時代なども参考にして考えようとしている。	○	
進んで、作品を比喩表現の効果に留意しながら読み味わい、学習課題に沿って、平仮名表記が作品にどのような効果をもたらしているか考えようとしている。		○
進んで、作品を、方言を取り入れたことの効果に留意しながら読み味わい、学習課題に沿って、作者の「いもうと」への思いと作品内の描写が、どのように関連しているかまとめようとしている。		○
進んで、作品を比喩表現の効果に留意しながら読み味わい、今までの学習を生かして、「大人になる」ことと「初々しさ」の関係について、作者の考えをまとめようとしている。	○	○

指導計画案

	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	【小景異情】 1　題名の意図を捉えさせる。 2　犀星とその詩の特質について理解させる。	❶題名に着目させ、「小景」と「異情」について考える。知技 ❷詩によみこまれた思いに留意し、音読する。知技 ❸「作者」の項を読み、室生犀星の詩の特質や詩人について説明する。思判表	❶「小景」つまり、日常のちょっとした情景に対する、「異情」（感覚の違和感）、ということに気づかせればよい。「異情」という普段聞きなれない言葉の持つ意味を理解させたうえで、自分たちが経験した「異情」の例などを想起させてもよい。 ❷生徒各人が、各編章の「異情」に対して、自由にイメージできるようにする。通読の際には、歴史的仮名遣い、文語表記であることにも留意させたい。 ❸「作者」の項を導入のきっかけにして、犀星の生い立ちについて説明を加えたい。そのうえで、この詩編からは詩人のどのような思いが読み取れるのか考えさせる方向に持っていく。
展開	1　詩の構成を理解させる。 2　表記や表現の工夫をつかませる。	❶詩編を二つに分ける。思判表 ❷「異情」と「ふるさと」との結び付きを考え、作者が今どこにいるのかを考える。思判表	❶教科書の指示行数に従えば、5行目までと、それ以降で表現の質が変わるところに着目させる。前半は、詩人にとっての「ふるさと」が描かれ、後半は、それを踏まえての、「ふるさと」を離れる決意が描かれていることに気づかせたい。そのためには3行目「よしや」、5行目「あるまじや」といった、理解しづらい語句については最初に理解させておくことが必要であろう。 ❷繰り返されている、「遠きみやこにかへらばや」に気づけば、今は「ふるさと」にいて、これから故郷を離れ都会に戻る、ということを容易に理解できよう。ただ、その際に、「ふるさと」を愛着しながらも「ふるさと」を離れる矛盾した心情を十分に理解させる。
まとめと発展	1　主題を理解させる。 2　詩人を理解し、詩人にとってふるさとがどのよう	❶どのような感情が描かれていたかを整理し、発表する。思判表	❶自己の感情を見つめて、その繊細さや激しさを短い言葉で的確に表現していく詩人の営為に気づくことができるように、整理させたい。

なものとして描かれているか理解させる。		❷ 表記や音韻による効果的な表現を指摘し、その効果について学ぶ。知技 ❸ 「ふるさと」と「みやこ」に抱く思いを理解する。主態
導入 **【およぐひと】** 1 詩題を理解させる。 2 イメージをつかませる。 3 理解への手がかりをつかませる。	❶ 「およぐひと」からどのようなイメージが喚起されるか注意しながら朗読をする。思判表 ❷ 「およぐひと」の何が描かれているかに注意する。思判表 ❸ 疑問に思った点を出させ、内容への興味を喚起する。思判表	❷ 詩の理解においては、言葉の意味だけでなく、表記や音韻からの理解も必要であることに気づかせる。短く、分かりやすい詩であっても、言葉の表層的な意味の奥には、緻密で、張りつめた言語世界が広がっていることを知らせる。 ❸ 「ふるさと」も「みやこ」も遠くにあって思うことで、思慕する地となるが、現実には双方とも過酷な地であることに理解が及んでいるか、確認させる。
展開 1 詩の構成について理解させる。 2 表記や表現の工夫をつかませる。	❶ 詩の構成を明らかにすること。思判表 ❷ 疑問に出されたことを取り上げる。特に「心臓」に「こころ」、「瞳」に「め」と読み仮名をふっている点に注目する。知技	❶ 朗読により、泳いでいるひとの姿を自己体験と結び付けてイメージさせる。 ❷ 視線が「からだ―二本の手―心臓（こころ）―瞳（め）―たましひ」と移っていることを確認することで構成をつかませる。 ❸ 「心臓」を「こころ」、「瞳」を「め」となぜ読ませているのか、「およぐひとの心臓」がなぜ「すきとほる」のか、「およぐひとの瞳」がなぜ「つりがねのひびき」を聞けるのか等々出てくるとよい。 ❶ 第一行・第二行は見える体の姿態、第三行・第四行は通常の感覚を超えた表現、第五行は見えない「たましひ」が月そのものではない、水面に映った月の影を見るという風に展開していることを押さえさせる。 ❷ 「心臓（こころ）」については、臓器としての心臓と見えない精神を表すこころとを併せて示している。「瞳（め）」については、単純な視覚器官ではなく、通常の感覚を超えたものであることを表そうとしていることを確認させる。

導入	**【永訣の朝】** １　題名の意味を理解させる。 ２　詩の構成を理解させる。 ３　賢治の詩の世界の理解を広げさせる。	
まとめと発展	１　主題を捉えさせる。 ２　詩の世界を広げさせる。 ３「およぐひと」から感じ取ったことをまとめさせる。	

❶ 日常感覚を超えた表現を含みながら、どのような象徴的な表現によって泳ぎの感覚が深く味わえるか話し合う。主態

❷ 萩原朔太郎の他の詩を読み、近代詩の先駆的な詩の世界に触れる。思判表

❸ 鑑賞文を八〇〇字程度で書く。思判表

❶ 詩題「永訣」の語の意味から、この詩が妹の死を歌ったものであることを知る。知技

❷ 範読を通しておおよその場面・意味を理解する。思判表

❸「わたくし」（賢治）、「おまへ」（妹、とし子）であることを理解する。

❹（　）内が方言で書かれた妹の言葉であることを理解する。思判表

❶ 直喩表現の「およぐひとの心臓はくらげのやうにすきとほる」は、水の中に身体を浸したとき、身体が水と同化したような感覚を表現しようとしたものであることを理解させる。

❷「およぐひと」と合わせて読ませたい詩は、参考に出した「ありあけ」「春の実体」などである。

❸「およぐひと」をどのように読み取り、どのような点が興味深かったのかを書かせて、理解の度合いを評価する。

❶ まず、「永訣」という語の意味を伝え、そこに「朝」と続くことで、まさに訣別のときの悲痛な思いを詠んだ詩であるということに気づかせたい。さらに、賢治と妹、トシ（とし子）についての解説を加えることで、より深い理解のための一助としたい。

❷ 範読によって、生徒の多くは、この詩のおおよその場面は理解できるであろう。特に（あめゆじゆ……）の方言のイントネーションに注意させる。

❸ ここで「わたくし」というのが賢治で、「おまへ」が妹、とし子であることはしっかり押さえさせておきたい。また「わたくしのけなげないもうと」「わたくしのやさしいいもうと」という表現から、「わたしたち」が、深い絆で結ばれた兄妹であることもここで理解できるはずである。

❹（　）内の音は、特に音読によって浮かび上がってくると思われる。範読または生徒自身による音読を通して、それが方言であること、さらに（　）が付されていることから、妹の言葉、さらには、賢治自身が想起している妹の言葉であることを気づかせる。

展開		**まとめと発展**
1 場面の展開を把握させる。 2 表記や表現の工夫をつかませる。		1 主題を理解させる。 2 「永訣の朝」から感じたことをまとめさせる。
❶ 場面の移り変わりを理解することで全体の構成を明らかにする。思判表 ❷ 前半の場面の違いを読み取り、妹の言葉によって変化する、「わたくし」の心の動きを理解する。 ❸ 後半の場面の違いを読み取り、祈りの深化をつかむ。思判表		❶ 「みぞれ」「雪」の表現の違いを理解する。知技 ❷ 賢治の他の詩編を読み、その
❶ 時間の推移や、情景描写の場面、心情独白の場面など、場面の違いに気づかせることで全体を六つの場面に分ける。（「構成」の項参照）そのうえで、「……」によって、大きく、前、後半部に分けることができることに気づかせる。 ❷ 前半部は、「みぞれはびちよびちよふつてくる」「けふ」（現在）に、少し前の出来事の回想が挟み込まれていることを押さえさせる。そのうえで、四度繰り返される妹の言葉、「（あめゆじゆとてちてけんじや）」に着目させ、この言葉が初めは、「わたくし」に、妹自身が渇きを癒すための言葉と理解されたこと、しかし、それが「わたくしをいつしやうあかるくするために」発せられたことに気づかせ、さらにはそれが宇宙とつながる結晶として理解されるようになる、その過程をしっかりと把握させたいものである。またそのような妹の思いが、「わたくしもまつすぐにすすんでいくから」という「わたくし」に生きていく決意を促した点も、併せて押さえさせる。 ❸ 後半部は、現在から未来へ向かう意識が描かれる。「おまへ」と「わたくし」の「ふたつのかけた陶椀」に盛られた雪は、「おまへとみんな」、つまり未来の妹と人々の幸福のための「資糧」とされる。そしてそのためには「わたくしのすべてのさいはひ」を犠牲にしてもかまわないと思うことで、「わたくし」は妹の死の悲しみに堪えることができるのである。また「あんなおそろしいみだれたそらから／このつつくしい雪がきたのだ」という表現からは、恐ろしい修羅から清浄な雪が生み出されるのだという感慨も読み取れることにも注意させる。	❶ 詩全般にわたって、「みぞれ」「雪」がそれぞれどのように捉えられているかを、話し合わせて発表させる。特に、「みぞれ」が「ふつてくる」「沈んでくる」という表現が、賢治のどのような認識と結び付いているかを考えさせる。 ❷ トシの臨終を詠んだ他の詩編、「松の針」「無声慟哭」などからも、愛

	導入	
	【汲む】 1 作者の思いをつかむ。	
世界に触れる。思判表 ❸ 場面の移り変わりを理解することで全体の構成を把握する。思判表 ❹ 前半の場面において、妹の言動によって変化する「わたくし」の心の動きを把握する。主態 ❺ 後半の場面を読み取り、祈りの深化を読み取る。主態	展開 1 作品の焦点となる言葉をとらえる。 2 人生の指針となる言葉について考える。 ❶ 私が気付かされたものの内容をまとめる。思判表 ❶「初々しさ」の意味するものについて考える。主態 ❷ 決定的な言葉との出会いということについて話し合う。思判表	❶ 表現指導の観点から、強く心に響いた作品を暗唱して、その感想文を書く。知技 ❷ 詩人とその作品について整理する。知技 ❸ 読書指導の観点から、教科書の詩の出典となる詩集を読み通すことで、詩人の詩の傾向を確かめる。知技
する妹を喪った賢治の悲しみの深さ、そしてそれを表現することへの思いを汲み取ることができる。 ❸ 前半、後半の区分けと、それぞれが三つの場面から成り立っていることへの理解が、詩の読解への重要なポイントになる。 ❹ 前半では、現在の時間系列に、近過去の回想が挿入されているが、その効果も含めて理解できているか、また繰り返される妹の言葉が、「わたくし」にどのような変化をもたらしたか、などを確認させる。 ❺ 後半では、独白、妹の姿の想起、そして祈りへと場面が展開するが、それを把握できているのか問う。また「わたくし」がどのように決意しているのかを確認させる。	❶「私の背のび」の意味を明らかにする。 ❶「大人」になることとの対比で考える。 ❷ 作者の生きる姿勢を明らかにする。	❶ 詩のリズム感や主題に応じた暗唱を心掛け、印象深い点を掘り下げて感想文をまとめる。 ❷ 文学史的な理解を促す。 ❸ 一冊の詩集全体からその詩的世界の雰囲気をつかむ。

小景異情

室生犀星

作者

室生犀星

明治二十二（一八八九）年～昭和三十七（一九六二）年。詩人・小説家。石川県金沢市裏千日町に生れる。父は小畠弥左衛門吉種で、母は独り住まいの吉種に仕えた女性だが、氏名を特定されるに至っていない。生後間もなく、真言宗雨宝院住職室生真乗の内縁の妻、赤井ハツに引き取られ、ハツの私生児、照道として届けられた。当時、ハツは明治十年生まれのテヱ、十七年生まれの真道を私生児としてもらい受け、育てていた。七歳のとき、室生真乗の養嗣子となり、室生姓となった。九歳のときに、実父吉種が死去し、生母の消息が不明となる。自らの出自、養育環境の苛酷さは、犀星の生涯に、また文学活動に重要な影響を与えることとなった。

明治二十八年、半年遅れて野町尋常小学校に入学。負けず嫌いの性格で教師や養母に反抗する少年であった。一方、養父真乗の慈悲深い性格や、生母への思慕の念から、孤独のうちにも自然を感受する詩心は熟成されていったとみられる。三十五年、金沢市立長町高等小学校を三年で途中退学し、血のつながらない兄、真道の勤める金沢地方裁判所の給仕として働くようになり、ここで文学と接近する契機となった。上司である川越風骨により俳句の手ほどきを受け、俳人藤井紫影が選者を務める「北国新聞」俳句欄に投稿し、しばしば入選する。また北国俳句会の最年少会員として熱心に句作に励んだ。三十九年、小品「河辺の初春」が「文章世界」に掲載。また四十年には「さくら石斑魚に添えて」が雑誌「新声」に児玉花外の選で掲載された。このころには新聞、雑誌に数多く掲載されるようになり、四十二年、北原白秋の「邪宗門」によって詩への情熱が高まると、裁判所の勤めをやめ、「みくに新聞」「石川新聞」の記者となる。文学で身を立てていくことを決意し、四十三年五月に上京。花外や白秋のもとを訪れ、詩作にはげむが、翌年の夏には困窮のうちに金沢に帰郷する。しかし、金沢でも養母との関係、恋人との問題、文学仲間からの中傷から耐えきれず、再び上京する。以後、上京と帰郷を繰り返し、自らの居場所を探し、苦悩する。本教材の「小景異情」はこのような状況を背景としている。

大正二年五月、白秋主宰の雑誌「朱欒」に「小景異情」が掲載される。同誌同月号に萩原朔太郎の詩「みちゆき」（のち「夜汽車」と改題され、「純情小曲集」に収められる）も載っていたが、彼から「今の詩壇では見ることのできない純な真実なもの」と評する熱烈な手紙をもらい、翌年、朔太郎のいる前橋を訪問。生涯つづく交友のきっかけとなる。同年六月、山村暮鳥を加え詩、宗教、音楽の研究を目的とする「人魚詩社」を結成し、雑誌「卓上噴水」を、五年六月には「感情詩社」を結成し、雑誌「感情」を創刊し、新たな詩作運動を進めた。朔太郎の影響を受け、ドスト

エフスキー、トルストイに傾倒し、人道主義的な「愛の詩集」へと詩風が変化した。

六年、養父が亡くなり。幾ばくかの遺産をもとに翌年の一月、第一詩集「愛の詩集」を自費出版し、四月には「新らしい詩とその作り方」を書き下ろしで出版。九月には感情詩社から「抒情小曲集」を出版する。同年、金沢の小学校教師の浅川とみ子と結婚するが、経済的な困難さもあり、出自や幼年期の思いを小説に表すことを決意する。八年には雑誌「中央公論」の編集長の滝田樗陰の高い評価のもと、「幼年時代」「性に眼覚める頃」「或る少女の死まで」を相次いで発表し、新進作家として認められた。その後、多作、濫作の時期があるが、十一年の長男豹太郎の死、翌年の朝子の誕生と関東大震災による金沢移住により作風も沈潜したものとなる。

大正末からは、日本の伝統的な庭や陶磁器などに親しみ、「魚眠洞随筆」「芭蕉襍記」などの随筆集も好んで出版。昭和二年七月の芥川龍之介の自殺に衝撃を受ける。七年の「鉄集」で詩との決別を宣言し萩原朔太郎と応酬するが、さまざまな形で詩は生涯にわたって書き続けられた。九年には「あにいもうと」を発表し、抒情性の色濃い作風から登場人物を多角的に捉える「市井鬼もの」といわれる小説群を描く作家となった。

戦争期には、私小説的な作品、王朝ものに材を得た作品、身辺の自然を描いた作品などを描いたが、戦後、自己の生涯と娘の生き方を描いた「杏っ子」（昭三十二、読売文学賞受賞）で復活。評論「我が愛する詩人の伝記」（昭三十三）、「かげろふの日記遺文」（昭三十四、野間文芸賞受賞）など、注目作を発表し続けた。自らの病を「われはうたへどやぶれかぶれ」で描き出し、肺癌により七十二歳で亡くなった。

作者を解くカギ

萩原朔太郎は「室生犀星の詩」（「日本」昭十七・四、五）で、「新体詩の出発以来、日本の詩は多く七五調や五七調の韻文で書かれて居た。（略）かうした詩形の規約を無視して、心の韻律をそのまま言葉の節奏に移し、大胆奔縦の自由詩で歌つたものは、実に室生犀星であつた。しかもかうした彼の詩篇（「小景異情」など）は、過去の詩に全く類例のない、特殊な魅惑的な音楽節奏に富んでるので、朗々と声をあげて愛吟するに足るものであつた。／さらにまた犀星の新詩業は、過去の文章語で書いた新体詩から、その非時代的な古典性を一掃して、文語詩をそのまま現代語化したことである。実に日本の文語詩は、犀星によつて全くスタイルを一新し、本質上に於て、現代口語詩と同じやうなものになつた。」と論じている。実際には、収録した「小景異情（その二）」は伝統的な五・七音の音数律に依拠しており、「大胆奔縦の自由詩」でないことは明らかであるから、本教材の鑑賞に際しこの朔太郎の主張を適用することは難しい。ただし、地方から上京してきた人間の故郷に対する愛憎という主題は極めて近代的なものであり、近代を生きる詩人としての切実な思いが表層の音数律を超えて滲み出ている、と理解することは可能であろう。また、犀星や朔太郎が詩人として最も活躍した大正時代は口語自由詩の全盛期である。文語詩であっても、それを超えるものを犀星の詩に見出そうとする朔太郎の批評からは、詩が新しく生まれ変わろうとする時代を生きた彼らの歴史が感じられよう。

出典

本文は「定本　室生犀星全詩集　第一巻」（冬樹社　昭五十三）によった。

大正七年九月、第二詩集「抒情小曲集」（感情詩社）。「小景異情」は「その一」から「その六」までの六つの詩編から成る。本教材では「その二」を取り上げた。「抒情小曲集」は三部構成で、「小景異情」は第一部の冒頭詩である。

初出は大正二年五月の「朱欒」で、そこでは「その六」とされており、詩集収録の際に配列が変えられた。（「参考」参照）

主題

故郷は遠くにあって思い悲しく歌うものであって、たとえ異郷の地で乞食になっても帰る所ではないという。故郷への愛憎を込め、心の中の故郷を思慕するとともに遠くの〈みやこ〉を帰りたい所として思慕する。

構成

前半（初め～二八六・5）
　ふるさととはどのような場所かを示し、たとえ異郷の地で乞食になっても帰るところではないと断定する。
後半（二八六・6～二八七・三）
　「ふるさとおもひ涙ぐむ」その心をもって、遠き都に帰りたいという願望を告げる。

指導上の注意点

●二八六ページ

問　冒頭の「ふるさとは」の句を、意味的に受けているのはどの行までか。

答　「ふるさとおもひ涙ぐむ」まで。

補　「ふるさとは」は、「遠きにありて思ふもの」であり、「悲しくうたふもの」でもあり、たとえ「異土の乞食」になったとしても、決して帰るところではない、と意味上は、つなげて理解することができるので、ここまでを前半部として把握させたい。

問　◉「帰るところにあるまじや」とあるが、理由として、どのようなことが考えられるか。

答　都で成功したいから、故郷に居場所がないから、など。

補　この詩の背景には、東京と地方の著しい落差がある。一般論としてでもよいので、都（会）と故郷の違いを想像させたい。

●二八七ページ

問　「そのこころ」とはどのような「こころ」か。

答　故郷に対する、離れていると涙が流れるほどいとしく恋しいという「こころ」。

補　涙が出るほど故郷が恋しいのだが、その思いを抱きつつ実際には「みやこ」に帰ろう

語句の研究

●二八六ページ

0小景異情　「小景」は日常生活の中で目に触れるちょっとした情景。ちょっとした眺め。「異情」は異にする感情、つまり「小景」にそぐわない感情ということになる。周りの景色とそぐわない、融け合うことのない自分の感情。ここでは故郷に対しての自己の感情の違和と理解することができよう。「小景」という景色と、「異情」という違和感とをつなげたところに犀星の詩の特色がある。

2悲しくうたふもの　ふるさとは、悲しくうたうもの。この「悲し」は、感情が胸に迫り、涙が出るほどの状態を表す語句である。また古語の「身にしみて、いとしい」という意味もこめられているであろう。初出誌「感情」に収められたときには、下に句点がある。

3よしや　たとい、仮に、という意味の副詞「縦」に、感動の助詞「や」がついたもの。不満足ではあるがやむを得ないと考えて放任・許容するさまを表す。もしかりに。たとい。万一。よしんば。次行「うらぶれて異土の乞食となるとても」にかかる。「よしや～とても～まじや」の一まとまりで作者の故郷拒絶の思いが示される。

4異土　異国の土地、という意味であるが、この場合は自分の故郷と異なる土地。異郷。

4乞食　「傍居」の意。道のかたわらなどにいて、また、家々を回って食物、金銭などを人に乞う者。最悪の場合を仮想した表現。

5あるまじや　あるまいよ。「まじ」は打消推量の助動詞、「や」は種々の語を受けて独語的詠嘆を表し、また、語調を整えるのに用いられる間投助詞。「感情」に収められたときには、下に句点がなかった。

6ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ　出郷して都にいっての自己を想像した部分。1・2行目に示された、遠くにいて思う「ふるさと」とつながる部分である。

●二八七ページ

1そのこころもて　「ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ」というこころをもって。「都」は東京を指すが、最終二行の「みやこ」は心に思い描く地であるとも考えられる。（「鑑賞」参照）

2かへらばや　「ばや」は自己の動作の実現に対する願望を表す。活用語の未然形に接

としているという、相反する心情を理解させたい。

問 **作者は「ふるさと」をどのように考えているのだろうか、話し合ってみよう。**

答 離れていると涙が流れるほどいとしく恋しい反面、現実の故郷にいるとうらぶれて乞食になっても帰りたくないところ。

補 ふるさとの相反する感情を話し合う中で理解させたい。主題を問うことにつながる。「ふるさと」への思いが一面的なものでないことに注意させたい。それぞれ対応する部分（4・5行）と（6・7行）を書き抜かせてもよいだろう。

鑑賞

本教材「小景異情」は六つの詩編から成るが、ここでは「その二」を抄出した。

「その二」の「ふるさとは遠きにありて」の詩は、故郷を詠んだ詩として現在でも多くの人に知られ口ずさまれており、遠く離れてしまった故郷はなつかしい……という思い詠んだものという風に捉えられているところがあるが、そこにとどまるものではない。「ふるさと」は遠くにあって思うものであり、悲しくうたうものだというのだが、なぜ「悲しく」なのだろうか。「ふるさと」は近くにあっては思えないということが背後にある。現実の故郷は犀星にとっては厳しく、だから異郷の土地で「乞食」となったとしても、おめおめと帰るところではないと拒む意志を示しているのである。実際に身を故郷においたとしても、「ふるさとは遠きにありて思ふ」ところにしかない。

「ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ／そのこころ」とは、都の夕暮にあってひとり「ふるさと」を思慕し、涙ぐむのであって、都にあっても心満たされてはいない。

「遠きみやこ」においても、帰りたいものだという想念の中にある「みやこ」なのであり、現実の都ではない。「都のゆふぐれ」という限定において、漢字で「都」と書かれているが、最後の二行のリフレインにおいては「遠きみやこ」となっているのは、現実の地としての「都」と想念の中の「みやこ」とを区別したいという意図を読み取ることも可能である。

従来「ふるさとは遠きにありて」の詩が、故郷で歌われたものか、東京で歌われたものか、二つの解釈がある。萩原朔太郎は「室生犀星の詩」（『日本』昭和十七年四、五月号）で作者の立っている場所は東京だとし、最後の二行に「都」が出てくる理由として（此所で故郷のことを「都」といっているのは、作者の郷里が農村ではなく、金沢市であるからである）と註をつけ、「都」の金沢へ帰りたいものだという意味に捉えている。その際、「室生犀星の詩」で引用した最後の二行のリフレインの表記は「遠き都に帰らばや」となっていて、ひらがなの「ふるさと」になっていなかった。初出の「朱欒」では、「遠き都にかへらばや／とほ続する。帰りたいものだ。この場合、都で夕方一人、故郷を思って涙ぐむような、そんな故郷に対する懐かしさと憧れを抱いたままで、都に帰っていきたいものだ、という意味になろう。

き都にかへらばや。」と漢字の「都」になっていて、「遠き」の方がひらがな表記の「とほき」と漢字表記の二様となっていて、詩集所収形ともども朔太郎の引用した形ではない。

久保忠夫氏は「その二」は金沢での作だとし、理由として第一、東京での作とするためには、「都」を東京、「みやこ」を金沢と分けて考えなければならない不自然さを伴うこと。第二、「都」と「みやこ」を分けて考えることも不可能ではないが、『抒情小曲集』時代に「みやこ」「都」が金沢を指した用例はなく全て東京を指し、金沢は常に「ふるさと」と呼ばれたこと。第三、「小景異情」は東京の小景に感じられた異情ではなく、金沢の小景に感じられた異情であること。第四、この詩は大正二年四月の作と推定されるが、このとき、犀星は金沢にいて、五月五日、東京に旅立つ準備をしていたこと、をあげている。この詩の成立についての明晰な整理となっている。

ただし従来、詩人が「みやこ」にいるのか、「ふるさと」にいるのかという点が問題にされてきたが、そうではなくいずれの場所にもいられない「遠き」ということが重要だとする宮崎真素美氏の見解が出されている。

どこへも心の置き所のない詩人のありようこそが、あり得べき安寧の場所を求めつつ、それをことばによって象ってゆくこと、それが詩篇創作のエネルギーに結びついているのだと考えたい。それは、詩人自身が実際にくり返した上京と帰郷の往復運動によってもたらされた感覚に裏打ちされているものであるかも知れない。詩篇のなかで、自分の位置がどこからも〈遠い〉場所にあるからこそ、この心の往き来が描き出せるのだろう。〈ふるさと〉もそして〈みやこ〉も〈遠い〉からこそ憧れ象ることができるのであり、創作の場を実在の場所に還元してしまうと、こういった中間的な不確実さが無視されてしまう。詩人が、「その人がこれぞと思う方をとればいい」という背景には、どこにも寄り添えない心象こそが詩篇の核であることを伝えているように思われてならない。

（〈遠き〉へむかう〈こころ〉――室生犀星「小景異情　その二」――」『愛知県立大学　説林』平成二十五年三月）

故郷金沢に身を置いて詠んだ詩と読めば、故郷の苛酷さを痛いほど感じて「ふるさと」を強烈に思慕した感情が受け取られる。しかし、こころの身の置き所は故郷を離れた「遠きみやこ」にある。ただし「都」が心安らぐ場所である保証はない。「かへらばや」という願望もまた想念の「みやこ」上に成り立つものと考えれば、宮崎氏の説は説得力をもつ。

久保忠夫氏は犀星から次のような返事を聞き出している。

「この詩はどこでおつくりになったのですか」というわたしの問に「このごろ中学校の教科書にのっているので、先生方からよくそういう質問が来る。ある人には『東京で』と答え、またある人には『金沢で』と答えてしまった。芭蕉の『閑（しづか）さや岩にしみ入蟬の声』の『蟬』と同じで、その人がこれぞと思う方をとればいいんですね……」と答えてくれた。（「ふるさとは遠きにありて　民衆詩運動の展開」『近代詩物語』昭和五十三年十月、有斐閣）

この犀星の答えに久保氏は諒承しないとし、鑑賞の領域から朔太郎と犀星の発言を除外すると述べているのだが、作られたのは

金沢だとする客観的状況からする見解は見解として押さえながら、「ふるさと」と「みやこ」が犀星にとってどのようなところとして歌われたのかを考えると、現実的には故郷も都も犀星には厳しい場所であり、遠く離れて思う中にしか「ふるさと」はなかったと読み取れる。

本教材は、故郷と都（東京）それぞれの場所に向けられた詩人の愛憎を読み取ることを内容上の主眼とするものである。従って、犀星自身が創作時にどちらにいたのか、という問題は、研究史上で争われたことがあるとはいえ、教室での鑑賞に深く関わるとは言い難い。また、実際の創作の現場と、詩篇内部の移動の力学の問題を混同しないことも重要である。

解釈の問題としては、久保忠夫氏（前掲）が述べる通り、詩人がどちらにいてもよいという説明は普通に考えて成り立ちにくい。末尾の「かへらばや」のリフレインが、今まさに都（東京）に帰ろうとしている様子を示す以上、少なくとも詩の後半においては故郷に身を置いている、とするのが自然な印象である。また、通常は故郷に「帰る」ものであるところを、都の方にこそ「帰る」のだ、という転倒の意味を適切に掬うためにも、故郷から都（東京）へ向かうという移動のあり方を前提とした方が読みやすいことは確かであろう。

この点について、末尾の「みやこ」が平仮名表記であるゆえに現実の東京を目指すのではない、という詩解（詩人がどちらに身を置いていてもよい、という読みに繋がる）も可能ではあるが、その場合、初出においては「都」と「みやこ」は書き分けられておらず、両者の書き分けが犀星の体系的な用字法とは言い難い点も念頭に置くべきだろう。特に本教材の収録形態においてこの詩は唯一の文語定型詩であり、五・七音のリズムを味読することが狙いでもあるので、表記の揺れに関してはリフレイン部であるために平仮名の表音性が活かされている、という観点や、「単調さを避けるため」（西原大輔『日本名詩選1』笠間書院、平成二十七）書き分けたという常識的な観点からの説明も有効であることを書き添えておきたい。

参考

本教材は、初出（「朱欒」大正二年五月）では、「その六」として掲載された。以下のとおり。

その六

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆうぐれに
ふるさと思ひなみだぐむ
そのこころもて
遠き都にかへらばや
とほき都にかへらばや。

・「定本 室生犀星全詩集 第一巻」 冬樹社 昭五十三

「小景異情」

その一

白魚はさびしや
そのくろき瞳はなんといふ
なんといふしほらしさぞよ
そとにひる餉(げ)をしたたむる
わがよそよそしさと
かなしさと
ききともなやな雀しば啼けり

その三

銀の時計をうしなへる
こころかなしや
ちよろちよろ川の橋の上
橋にもたれて泣いてをり

その四

わが霊のなかより
緑もえいで
なにごとしなけれど
懺悔の涙せきあぐる
しづかに土を掘りいでて
ざんげの涙せきあぐる

その五

なににこがれて書くうたぞ
一時にひらくうめすもも
すももの蒼さ身にあびて
田舎暮しのやすらかさ
けふも母ぢやに叱られて
すもものしたに身をよせぬ

その六

あんずよ
花着け
地ぞ早やに輝やけ
あんずよ花着け
あんずよ燃えよ
ああ　あんずよ花着け

「新らしい詩とその作り方」

この作は、私が都にゐて、ときをり窓のところに佇つて街の騒音をききながら「美しい懐かしい故郷」を考へてうたつた詩である。／誰でも都会に住む人人らは時をり私のやうに悲しげ

な目付をして故郷の温かい山河を想起して、そこに曾て営んだ平和な生活を胸に浮かばせるであらう。自分の家の庭や、庭の木や、幼少のをりに遊んだ草場や公園や夕暮の町の有様や、さては、楽しげな善良な自分らを愛してくれた親密な人人やを心に描いて、何一つ身に親しまない「旅」にあるやうな慌しく加之も冷たい都会を悲しく思ふであらう。いつの世も故郷は吾吾の胸に緑緑として燃えたり煙つたりしてゐる。夜はゆめにまで親密な山河に遊ぶことさへ願ふのは、人として為ければならない「感情の慰さめ」である。しかし自分は帰りたくない。自分は強大な生きた姿で此都会にありたい。自分が見搾らしくよし乞食となつてもかへつてはならない。／まこと故郷はただ遠方にあつて思慕するところである。かへつては最つと寂しく悲しいことが多いことだらう。自分はやはり此の都会にゐたい。大意はこの心持を体したものである。

参考文献

❊ 教師用

「日本近代文学大系39」鳥居邦朗　角川書店　昭四十八
「研究・露風・犀星の抒情詩」三浦仁　秋川書店　昭五十三
「定本　室生犀星全詩集　第一巻」　冬樹社　昭五十三
「室生犀星論」船登芳雄　三弥井書店　昭五十六
「室生犀星文学年譜」室生朝子他編　明治書院　昭五十七
「室生犀星評価の変遷」奥野健男　三弥井書店　昭六十一
「室生犀星研究」久保忠夫　有精堂　平二
「論集　室生犀星の世界　上」室生犀星学会編　龍書房　平十二
「室生犀星伝」本多浩　明治書院　平十二
「新研究資料現代日本文学　第七巻・詩」　明治書院　平十四
「室生犀星」三浦仁　おうふう　平十七
「室生犀星研究」高瀬真理子　翰林書房　平十八
「室生犀星」星野晃一　踏青社　平二十一
「室生犀星の詩法」九里順子　翰林書房　平二十五

❊ 生徒用

「〈新装版現代詩読本〉室生犀星」　思潮社　昭六十
「室生犀星詩集」　思潮社　平元
「室生犀星事典」葉山修平監修　鼎書房　平二十
「切なき思ひを愛す」室生犀星文学アルバム刊行会編　菁柿堂　平二十四

およぐひと

萩原朔太郎

作者

萩原朔太郎

明治十九（一八八六）年～昭和十七（一九四二）年。詩人。群馬県群馬郡前橋市北曲輪町に父密蔵、母ケイの長男として生れる。父は東京大学医学部別科を卒業し、群馬県立病院副院長を経て、自宅で開業していた。大正七年には前橋医師会長に選ばれるなど、信望の高い医師であった。明治三十三年、前橋中学に入学。一年生の頃から同居していた従兄の萩原栄次の影響で鳳晶子（与謝野晶子）の歌集「みだれ髪」を読み、短歌に傾倒した。校友会誌「坂東太郎」に短歌などを発表し、回覧雑誌「野守」を友人たちと出した。「明星」に短歌を投稿し、新詩社の社友となった。詩人の一生を貫く浪漫精神は、ここに胚胎するとみられる。学業においては三十七年に前橋中学を五年進級の際、落第。三十九年に前橋中学を卒業し、翌四十年九月、第五高等学校（熊本）英文科に入学するが、翌四十一年には二年に進級できず第六高等学校（岡山）独法科に入学。しかし四十三年には退学する。その後慶応義塾大学予科に在籍したり、上野の東京音楽学校（現、東京芸術大学）へ進学する計画を立てたり、京都大学文学部を受験したりするが、悉く失敗した。将来への展望が開けないまま、文学のほか、哲学、キリスト教、西洋趣味としての音楽、演劇、絵画、写真、映画等に関心を向け、創作も短歌から詩へと移っていく。

大正二年、北原白秋の主宰する「朱欒」五月号に「みちゆき」（「純情小曲集」収録の際に「夜汽車」と改題）ほか六編の詩を発表。同じ号に掲載された室生犀星の「小景異情」を「今の詩壇では見ることのできない純な真実なもの」と評する書簡を犀星に送り、生涯続く交友のきっかけとなる。大正三年に詩・宗教・音楽の研究を目的とする人魚詩社を設立し、翌年三月、雑誌「卓上噴水」を創刊（～第三集、五月）。さらに五年に犀星と「感情」を創刊し、三木露風らの観念的象徴詩に対抗し、詩壇を刺激した。六年第一詩集「月に吠える」を出版。情緒や感覚の次元でしか捉え得なかった近代人の不安の情動を、深い生命の声として形象化し、詩壇に戦慄を与えた。八年、上田稲子と結婚。翌年に長女葉子、十一年に次女明子（あきらこ）が生まれた。同年、アフォリズム集「新しき欲情」を刊行。思想詩の新たな表現を提示した。十二年、第二詩集「青猫」を出版する。「全く疲労の椅子に身を投げ出したデカダンスの悲哀」（「定本青猫」序）を主調とする世界を口語を柔軟に駆使することで描き出した。付録として書かれた「自由詩のリズムに就て」では、心内の節奏と言葉の節奏との一致を主張している。

十四年、妻子を連れて上京するが、経済的な支えは家からの援助であった。同年出版された「純情小曲集」は、初めて詩を書いた頃の「なつかしい思ひ出」の〈愛憐詩篇〉と愛憎こめた故郷への思いを記した〈郷土望景詩〉の二部構成で、文語で表現されて

いる。その後、ダンスに端を発した家庭崩壊から昭和四年、妻との離婚により二児を伴い帰郷。五年の父の死後、二児、妹アイ、母と東京に住むようになる。八年には自己設計の家が完成した。九年出版した「氷島」では、生活上の挫折、漂泊者としての虚無と寂寥を漢文訓読調で激しく表白している。

詩集だけでなく、アフォリズム集「虚妄の正義」（昭四）、「絶望の逃走（昭十）や詩論集「詩の原理」（昭三）、エッセイ集「純正詩論」（昭十）、「日本への回帰」（昭十三）、小説「猫町」（昭十）、随筆集「廊下と室房」（昭十一）、古典鑑賞「郷愁の詩人与謝蕪村」（昭十一）を出版。さらに詩集においても「定本青猫」（昭十一）で〈青猫〉世界を、「宿命」で〈散文詩〉と〈抒情詩〉の二部構成に編集している。詩的直観力と文明批評家の眼により日本の近代を問いなおすスタンスをとり続けた晩年の著作の批評的意味は大きい。十七年五月、東京世田谷の自宅で急性肺炎のため死去。五十五歳であった。

作者を解くカギ

詩集「月に吠える」は文語詩から口語詩へと変化する、その俎上にあった。朔太郎は大正四年六月以降、詩作を中断し、大正五年五月に再び詩を発表するが、中断以前が文語詩、再開後が口語詩と傾向としては大まかにはいえるが、中断する直前には口語詩を発表している。また文語詩においても口語詩的要素、口語詩においても文語的要素は含まれている。

「およぐひと」（大正五年五月「ARS」）の所収された「くさつた蛤」の章は中断直前の詩と再開直後の詩が収録されており、口語詩が中心となっている。

出典

本文は「荻原朔太郎詩集」（思潮社　昭五十）によった。

「月に吠える」（大六）の「くさつた蛤」の章に所収。初出は山村暮鳥が主宰した「LE・PRISME」第二号（大五・五月号）。題名は「およぐひと（泳ぎの感覚の象徴）」であった。ともに発表された詩「椅子」にも題名に（静物よりきたる感覚の象徴）が付されていた。初出と詩集所収形には、「胴体」→「心臓（こころ）」、「透きとほる」→「すきとほる」、「およぐひとのこころ」→「およぐひとの瞳（め）」、「月をみる」→「水のうへの月をみる」の異同がある。

主題

泳いでいるときの全身で水にふれる感覚を象徴的に表現した。日常感覚とは異質な感覚世界を描いている。

構成

第一行〜第二行目
　およぐひとのからだの形態
第三行〜第四行目
　およぐひとの「心臓（こころ）」と「瞳（め）」について
第五行
　およぐひとの「たましひ」について

指導上の注意点

●二八八ページ

問　この詩から、どのような情景が浮かぶか。

答　夜の海に体をななめに伸ばし二本の手を長くそろえて浮かぶおよぐひとの姿、陸の方からつりがねの響きが聞こえる。水の上には月が映っている。

問　「心臓（こころ）」が「くらげのやうにすきとほる」という直喩表現は何を表そうとしているのか。

答　およぐひとが水の中に身を浸し、体全体が水と同化するような感覚となったとき、心臓もくらげ同様に透きとおったように感じられる。

問　◉「心臓」を「こころ」、「瞳」を「め」と読ませることで、どのようなことを表現しようとしたのか。

答　「心臓」を「こころ」と読ませることで、単に臓器としての心臓ではなく、精神を表すものであることを表そうとしている。見える世界だけでなく、見えないけれどもある精神性を併せ示そうとしている。また「瞳」に「め」と読み仮名をふることで、単なる視覚機能ではなく、日常感覚を超えた世界を暗示している

語句の研究

●二八八ページ

3およぐひとの心臓（こころ）はくらげのやうにすきとほる、「心臓」と「くらげ」が透きとおるものとして結び付けられた直喩表現。「心臓」が透きとおることは考えられないが、水の中に体を浸したりするとき、体が水と同化したような感覚になると「すきとほる」感じは身近なものになる。また見える臓器としての心臓を見えない「こころ」と二重にすることで、「すきとほる」イメージを強めている。初出は「およぐひとの胴体はくらげのやうに透きとほる、」となっていて、肉体のイメージが強い「胴体」であり、意味と一体化した漢字「透きとほる」が用いられている。

4およぐひとの瞳（め）はつりがねのひびきをききつつ、瞳（ひとみ）は光線の入るところで、光などの刺激の強弱によって、狭めたり広げたりする。明るいときや近くの物を見るときは縮小し、暗いときや遠方を見るとき、驚いたときには拡大する。心理的なものにも反応するこの目の大事な機能の部位を「め」とすることで、この詩においては単なる視覚器官ではなく、音をまるで見るかのように感じとるさまを表現した。つりがねは寺院の鐘楼などにつるしてある大きな鐘のこと。「瞳」について久保忠夫の注（「日本近代文学大系 37　萩原朔太郎集」）では「すずしさや鐘をはなるる鐘の声」（蕪村）の句を紹介している。

5およぐひとのたましひは　「たましひ」は生きものの体の中に宿り、心の働きをつかさどるものとされているが、こころの内部からの視線が示されている。

5水のうへの月をみる　初出では「月をみる」となっていて、直接、空の月に視線を向けることになっていたが、水面に映る月に視線を向ける形に変更された。実体ではなく幻の像としての月を意識した表現。

鑑賞

初出は山村暮鳥が主宰した「LE・PRISME」第二号（大五・五月号）。題名は「およぐひと（泳ぎの感覚の象徴）」であった。ともに発表された詩「椅子」にも題名に（静物よりきたる感覚の象徴）が付されていた。萩原朔太郎はこの二編の詩に（感覚の象徴）を表現しようとしていたことが分かる。

何を見たのか、何を聞いたのか、何を嗅いだのか、何を触ったのか、何を味わったのか、その対象をいうことは簡単だが、体で感じたものを言葉で表そうとすることは難しい。『月に吠える』の自序で朔太郎は「私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「ことがら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感触してもらひたいことである。」と書いていた。

「椅子の下にねむれるひとは／おほいなる家をつくれるひとの子供らか」という二行の詩「椅子」は、椅子という静物から感じとったものを、椅子の下にねむるひとでしかも「おほいなる家をつくれるひとの子供ら」とするという幻像として象徴的に表している。

「およぐひと」にも（泳ぎの感覚の象徴）と付記されていたように、水の中を泳いでいるときの感覚を表そうとしたものである。地上にいる日常とは異質な感覚世界で、水の中に体が溶けだし水そのものとなった様な感覚、水と同化したような身体感覚は泳いだ者であれば誰でも思い起こせるもので、「およぐひとの心臓（こころ）はくらげのやうにすきとほる、」という奇妙な表現もその感覚を表していることが分かれば、納得できるであろう。初出では「およぐひとの胴体はくらげのやうに透きとほる、」であり、透きとおるものが胴体という肉体そのものだった。その「胴体」を体の中枢部位の「心臓」でしかも見えない精神を意味する「こころ」と読み仮名をふることで、形態的にもくらげと通じやすくした。「およぐひとの瞳（め）はつりがねのひびきをききつつ、」においても視覚機能をもつ「瞳（め）」を聴覚機能に結び付けることは、読む人を戸惑わせる。しかし泳ぎの感覚は地上の日常とは異質であり、心理的なものにも反応するこの目の大事な機能の部位を「め」とすることで、単なる視覚器官ではなく響きを聞くという通常感覚を超える機能を持たせ、音をまるで見るかのように感じとるさまを表現した。最終行で「たましひ」が見るものを、「月」から「水のうへの月」に変えたのも、実体ではなく映った幻像としての月とすることで、心に映る世界であることを暗示している。

「およぐひと」の収められた章「くさつた蛤」には「なやましき春夜の感覚とその疾患」とあり、疾患と結び付く感覚世界を表そうとした章であることが示されている。

この章の冒頭の詩は「内部に居る人が畸形な病人に見える理由」だが、家の内部にいて窓かけのれいすのかげに立ち、遠めがねで外を見、けさ「きやべつの皿」を食べ過ぎ、粗製の窓硝子なので、外からは顔がうすぼんやりと、瞳（め）がいくらかかすんで、また顔が甚だしくゆがんで見えることになると、「わたし」は説明する。

だが、「わたし」は「私をみつめてゐる」「薄気味わるく笑つてゐる」「君」を意識し、「わたくし」は「健康すぎるぐらゐなもの」と強調する。一見、道理ある説明をしているようだが、遠め

がねで見ているものは「につける製の犬だの羊だの」「あたまのはげた子供たちの歩いてゐる林」で、奇妙なものだが「わたし」の口ぶりからは奇妙とは見ていないことが分かる。最後に腰から下がはっきりしないのは、馬鹿げた疑問で「青白い窓の壁」にそって家の内部に立っているからだと説明を加える。外部の人に自分が病人と見えることに気づきながら、その視線に苛立ち自分は健康すぎるものだと強調するが、道理あるような説明は奇妙に空転する。内部感覚を描こうとする難しさ、構造を描いた詩ともいえる。

「およぐひと」の前におかれた詩は「ばくてりやの世界」だが、ここでは目には見えないが「およぐもの」として生きて存在する「ばくてりや」が描かれている。「ばくてりやの足、／ばくてりやの口、／ばくてりやの耳、／ばくてりやの鼻／ばくてりやがおよいでゐる。／あるものは人物の胎内に、／あるものは貝るゐの内臓に／あるものは玉葱の球心に、／あるものは風景の中心に。」というように細菌である「ばくてりや」の知識をベースにおよぐ「ばくてりや」を可視化したのである。

「およぐひと」にみられるように、萩原朔太郎は日常に見える世界の感覚を突き破り、見えない内部感覚を言葉によって表現した。

参考

・「萩原朔太郎全集　第一巻」月に吠える　筑摩書房　昭五十

「月に吠える」序（抄）

私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「こと がら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感触してもらひたいことである。私の心の「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他の言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによつて表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心伝心である。そのリズムを無言で感知することの出来る人とのみ、私は手をとつて語り合ふことができる。

「ありあけ」

ながい疾患のいたみから、
その顔はくもの巣だらけとなり、
腰からしたは影のやうに消えてしまひ、
腰からうへには藪が生え、
手が腐れ、
身体（しんたい）いちめんがじつにめちやくちやなり、
ああ、けふも月が出で、
有明の月が空に出で、
そのぼんぼりのやうなうすらあかりで、
畸形の白犬が吠えてゐる。
しののめちかく、
さみしい道路の方で吠える犬だよ。

「春の実体」

かずかぎりもしれぬ虫けらの卵にて、
春がみつちりとふくれてしまつた、
げにげに眺めみわたせば、
どこもかしこもこの類の卵にてぎつちりだ。
桜のはなをみてあれば、
桜のはなにもこの卵いちめんに透いてみえ、
やなぎの枝にも、もちろんなり、
たとへば蛾蝶のごときものさへ、
そのうすき羽は卵にてかたちづくられ、
それがあのやうに、ぴかぴかぴかぴか光るのだ。
ああ、瞳（め）にもみえざる、
このかすかなこの卵のかたちは楕円形にして、
それがいたるところに押しあひへしあひ、
空気中いつぱいにひろがり、
ふくらみきつたごむまりのよに固くなつてゐるのだ、
よくよく指のさきでつついてみたまへ、
春といふものの実体がおよそこのへんにある。

参考文献

❊教師用

「伝記萩原朔太郎」上・下　嶋岡晨　春秋社　昭五十五
「萩原朔太郎」（鑑賞日本現代文学12）久保忠夫編　角川書店　昭五十六
「萩原朔太郎詩私解」那珂太郎　小沢書店　昭六十
「萩原朔太郎〈感情の詩学〉」（日本文学研究資料新集24）坪井秀人編　有精堂　昭六十三
「萩原朔太郎論」上・下　久保忠夫　塙書房　平元
「新文芸読本　萩原朔太郎」　河出書房新社　平三
「萩原朔太郎〈日本文学研究大成〉」田村圭司編　国書刊行会　平六
「萩原朔太郎〈言語革命論〉」北川透　思潮社　平七
「伊藤信吉著作集　第二巻」伊藤信吉　沖積舎　平十三
「萩原朔太郎」1、2　飯島耕一　みすず書房　平十六
「国文学　解釈と教材の研究」学燈社　昭四十八・十一、五十三・十、平元・六、平十二・一
「国文学　解釈と鑑賞」　至文堂　昭五十二・六、五十七・五、平十四・八
「萩原朔太郎というメディア」安智史　森活社　平二十
「現代詩手帖」　思潮社　平十一・二、平二十三・十

❊生徒用

「萩原朔太郎」磯田光一　講談社　平五
「萩原朔太郎」大岡信　筑摩書房　平六
「萩原朔太郎」三好達治　講談社　平十八

永訣の朝

宮沢賢治

作者

宮沢賢治

明治二十九（一八九六）年～昭和八（一九三三）年。詩人・児童文学者。岩手県稗貫郡里川口村（現花巻市豊沢町）に、父政次郎、母イチの長男として生まれる。家業は質・古着商。盛岡中学校時代（明治四十二年～大正三年）には短歌を制作した。大正三年、島地大等編の「漢和対照妙法蓮華経」を読み、感動した。盛岡高等農林学校時代（四年～九年）には片山正夫の「化学本論」に啓発され、座右の書となった。六年、同人雑誌「アザリア」の活動に参加し、深く親交することになる保阪嘉内と出会う。九年、純正日蓮主義を主張した在家の仏教団体である国柱会（田中智学が創設）に入会した。

十年一月から八月まで東京に滞在し、国柱会の奉仕活動に参加する。「詩歌文学を得意とするのならば、その詩歌文学の上に純粋の信仰がにじみ出るようでなければならぬ」という示唆を受け、法華文学の創作に没頭した。妹トシの喀血の報を受け帰郷。十年十二月から十五年の三月まで稗貫（後に花巻に改名）農学校教師となる。代数・農産製造・作物・化学・英語・土壌・肥料・気象等を担当した。十一年十一月二十七日、トシ死去。深刻な衝撃をうけた。十三年、「春と修羅」と「注文の多い料理店」を出版。

花巻農学校を退職したのち、下根子桜の別宅で独居自炊生活をし、農事講演や肥料相談、楽団の演奏練習等の文化活動を本格的に始めた。羅須地人協会時代である。昭和三年、無理が重なり病臥。原稿の推敲や文語詩を創作する。やや体調が戻り東北採石工場の技師となるが、喀血。「雨ニモマケズ」を手帳に書いたのは、六年十一月三日のことである。療養を続けていたが、八年九月二十一日、死去。国訳妙法蓮華経一千部を印刷し、友人知人に配布することを、父に遺言した。

作者を解くカギ

高村光太郎は宮沢賢治を「コスモスの所持者」と呼んだ。賢治の作品において確かにコスモスの運行に身をゆだねる、ある種の愉楽を読者は感じることができる。地方的、個的であることがそのまま普遍的、人類的であるという共存の秘密は、コスモスの原理がミクロからマクロに至るまで、科学的にまた宗教的に通じ合う論理として捉えられているからであろう。生前賢治は〈心象スケッチ〉「春と修羅」と〈イーハトブ童話〉「注文の多い料理店」の二冊しか出版せず、未発表の原稿が膨大に残されていたわけだが、筑摩書房版「校本　宮澤賢治全集」に続き「新校本　宮澤賢治全集」が完結し、別巻の補遺・索引も出版された現在、賢治の度重なる推敲の過程をたどれるようになり、賢治文学の多角的な魅力がますます注目されてきている。

出典

本文は「新校本　宮澤賢治全集　第二巻」（筑摩書房　平七）によった。

「心象スケッチ　春と修羅」は自費出版で大正十三年四月に出版された。「永訣の朝」はこの〈心象スケッチ集〉に所収。十五年十二月の「銅鑼」にも発表されている。

主題

臨終を前にして愛する妹が求めた「あめゆき」が持つ意味を思い、今度はこんなに自分のことばかりで苦しまないように生まれてくる、という妹に報いる生き方を決意する。この「ゆき」が天上のアイスクリームとなって、妹とみんなに「聖い資糧」をもたらすのであれば、「わたくしのすべてのさいわい」を犠牲にしてもかまわないと思うことで、「わたし」は妹の死の悲しみに耐える。

臨終の妹と彼女の死を迎える「わたし」との「あめゆき」を媒介にした深い交感。

構成

「わたくし」の心の中で反芻される（　）内の妹の言葉と、「わたくし」を視点とした情景描写と心情独白から成っている。「わたくし」の今いる場所は、庭の御影石材の上で、松の枝に積もった雪をとろうとしている。少し前の出来事の回想、幼児期の過去へ向かう意識、そして未来へ向かう意識という時間意識が見られる。

場面展開は次のようになっている。

《前半部》庭先にたたずむ「わたくし」の心に、少し前の出来事が反芻される。その反芻によって促される今の「わたくし」の決意

（初め〜二八九・7）

「わたくし」は庭先に立ち陰惨な雲から降ってくるみぞれをながめている。（屋外）

（二八九・8〜二九〇・2）

妹の願い求めた雨雪を取りに外に飛び出した少し前の出来事の回想。（室内から屋外へ）

（二九〇・3〜12）

「わたくし」は妹が願い求めた「雪のひとわん」の意味を理解し、これからの自分の生き方を決意する。

《後半部》現在から未来へ向ける意識

（二九〇・13〜二九一・13）

松の枝のみぞれを妹の「さいごのたべもの」としてもらっていこうとする行為についての独白。

（二九一・14〜二九二・10）

想起される病室で苦しんでいる妹の姿と妹のいった言葉

（二九二・11〜終わり）

「ふたわんのゆき」が「天上のアイスクリーム」になって「おまへとみんな」の資糧となることを祈る。

指導上の注意点

●二八九ページ

問 **繰り返される「（あめゆじゆとてちてけんじや）」は「わたくし」にとってどのような意味の変化をもたらしたのか。場面に即して説明しなさい。**

答 もともとは激しい熱や喘ぎの中からもれた言葉で、渇きを癒す意味と理解されていた。そのため一刻も早くという思いで飛び出したわけだが、庭に立ち、「わたくしをいつしやうあかるくするために」という妹の本当の気持ちを理解する。そして四度目の「（あめゆじゆとてちてけんじや）」では宇宙とつながる結晶としての雨雪と捉えるようになる。

問 **「あめゆじゆ」を盛る器は「ふたつのかけた陶椀」だが、なぜふたつなのか。**

答 いもうとと「わたくし」の陶椀を用意し、別れに際しての「雪のさいごのひとわん」をそれぞれ共有しようとした。そして「おまへとわたくし」のふたつは、雪が天上のアイスクリームになることによって「おまへとみんな」とに意味を変えていくことが願望された。

補 「おまへとみんな」とあるように、妹とみんなの分が用意されるのである。

語句の研究

●二八九ページ

0永訣の朝　「永訣」は永別、死に別れの意味。トシと死に別れた日の朝。

2とほくへいつてしまう　死んでこの世からいなくなってしまう。妹の魂が天上の世界に転生してほしいという願望。

4あめゆじゆとてちてけんじや　「あめゆきとつてきてください」という賢治が付けた共通語の註がある。「けんじや」は「けろじや」がさらに訛ったものと推察される。幼児語をリズミカルに組み立て、リフレインを用いることで、賢治とトシの兄弟の絆を過去に遡らせ、緊迫した臨終場面と重層させながら二人の幼児体験を回想的に再現しているのではないか、という相馬正一の説もある。

8蓴菜　スイレン科の多年生水草。別称、ぬなは。長い葉柄の葉は水に浮かび裏面が紫色でぬめりがある。夏に水面近く紫色の花を付ける。芽、若葉は食用となる。

11まがつたてつぽうだまのやうに　病室から庭に飛び出した「わたくし」の行動の軌跡。妹の願いをかなえようと心せく心理の形容との複合した表現。「チユンセはまるで鉄砲丸のやうにおもてに飛び出しました。」（「手紙　四」）、「ジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあがりました。」（「銀河鉄道の夜」）という用例もある。

●二九〇ページ

3蒼鉛いろ　蒼鉛は、ビスマス（bismuth）。金属元素の一つ。赤みを持つ銀白赤色。半導体、触媒、ヒューズ等に用いられる。代表的な輝蒼鉛鉱は銀白色不透明で金属光沢がある。「蒼鉛いろ」はこの色彩をいう。

4みぞれはびちよびちよ沈んでくる　「びちよびちよ」は水分を多く含んだことの擬態語。「みぞれはびちよびちよふつてくる」が「沈んでくる」へと言い換えられている。みぞれを横から見る視線と見上げる視線の違いを的確に表現している後で「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの／そらからおちた雪」という捉え方で、宇宙的な視野から雪を「そらからおちた」とみている。

5あああとし子　死のうとする妹に向けた胸つまる思いの呼びかけ。戸籍では「トシ」。明治三十一年十一月五日生まれ。賢治の二歳年下の妹で、日本女子大学家政学部を卒業。大正九年九月より母校の花巻高等女学

問 ◉「ふたつのかけた陶椀」という表現から、どのようなことが分かるか。

答 作者と妹が、長い間、仲良く愛用してきたこと。

●二九〇ページ

問 「沈んでくる」とあるが、「ふつてくる」とした場合、印象がどのように異なるか。

答 「ふつてくる」は室内から見える雪の様子を捉えているが、「沈んでくる」は外に出た「わたくし」に向かって降ってくる雪の動きの印象を捉えた表現となっている。

問 「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」に含まれる「そら」が、「あんなおそろしいみだれたそら」であるのは、なぜか。

答 みぞれの降る「そら」の異常さを強調している。「おそろしいみだれたそら」と「うつくしい雪」とのコントラストを鮮やかに示す。修羅の様相を示す空から清浄な美しい雪が生み出されるという感慨。

●二九二ページ

問 ◉「やさしくあをじろく燃えてゐる」とは、「いもうと」のどのような様子を表しているか。

答 火に例えられた妹の命が、燃え尽きようとしている、危篤状態でありながら、最後の力を尽くして熱に堪えている姿を「燃えてゐる」と表現した。兄へのけなげな思いや

校教諭心得となり、英語・家事を担当した。翌年六月より過労のため発熱、病臥。八月に喀血し、九月には学校を退職し療養生活に入った。十一年十一月二十七日結核のため、二十四歳で死去。トシに対して賢治は自分を「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」（「無声慟哭」）と思っていた。

11わたくしもまつすぐにすすんでいくから

「手紙　四」で「私」に手紙を言いつけた人の言葉として「チユンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇気を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。（中略）チユンセがもし勇気のあるほんたうの男の子ならなぜまつしぐらにそれに向つて進まないか」とある。

キー・ポイント　**あめゆきとってきてください**　この妹の依頼は「わたくしをいつしやうあかるくするために」と「わたくし」に理解されている。これは妹に何か尽くしてやりたい、という兄の気持ちを、妹がくんでくれたことに、兄が感謝しているかのように捉えられるかもしれないが、そうではないだろう。周りを明るくする雪の特性によって兄の悲しむ心を励まそうとして妹が頼んだのだ、と兄は理解したのである。さらにその雪は、「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」からのものであり、宇宙の運行の一結晶に触れることを意味する。狭い個の悲しみにとどまってはいけないことを、妹が知らせようとしたのだと理解したのである。

●二九一ページ

2ふたきれのみかげせきざい　「みかげせきざい」は花崗岩、御影石。硬く美しいので、建築石材や墓石に用いられる。

5雪と水とのまつしろな二相系をたもち　相には固相、液相、気相の三つがあり、このうちの二つの相が共存している系を二相系という。みぞれは雪（固相）と水（液相）の二つの状態で共存している。「ふたきれのみかげせきざい」にあぶなくたっているさまと、二相系の保たれた状態が共通している。

9さいごのたべものをもらつていかう　「取っていこう」「持っていこう」ではなく、「もらう」という言い方に自然からの頂き物という敬虔な意識が表されている。「わたしたちは、氷砂糖をほしいくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、

補 りを抱きながら横たわっている様子。高温の炎の色である青色で妹の激しい熱のさまを表すとともに、澄んだ炎の美しさをも表している。

問 **この詩では、妹の言葉が郷里の方言で引用されている。これは、どのような効果をもたらしているか。**

答 愛する妹の臨終に際しての肉声が直後、作者の心に訴えかけ、その肉声を通して愛惜し、また感謝や誓いの気持ちを抱くようになっていく作者の姿を、印象的に読み手に伝える効果。

桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。」（「注文の多い料理店」序）とあるように、自然現象は食べ物、飲み物として感受されている。

11 みなれたちやわんのこの藍のもやう　「青い蕈菜のもやうのついた／これらふたつのかけた陶椀」を言い換えたもの。「かけた」や「みなれた」に幼児から今まで二人が共に辿ってきた時間が反芻されていることが分かる。

13 Ora Orade Shitori egumo　「あたしはあたしでひとりいきます」という注を賢治は付けている。詩集印刷用原稿には初め「おらおらでしゅとり行ぐも」とあったが、ローマ字表記に変更した。この方言だけローマ字表記にした理由を小沢俊郎は次のように説いた。「そのことばが賢治の耳に音としてだけ響いたことを示しているのであろう。知らない外国語を聞いた折のように、その音声が意味を持たないもののごとく聞こえた。ということは、それほど、聞き手賢治の気持にとって異質のものだった、ということになる。」「とし子は、自分の死をはっきり見つめ、正面から死に対峙していた。周囲の一人だって回復の見込みがないなどと言いはしなかったのに、死を直覚し、死と向き合っていた。しかも、怖れていず、自己放棄もしていなかった。兄や家族たちと別れて、一人だけ先に死んでゆくほかない事態を、はっきり認識していた。とし子の、その凛とした気持が、人間の究極の孤独を直視して Shitori と言い、己が死を egu（行く）と呼んだ点に認められている。」『Ora Orade…』の一行を間に挟んで、ほとんど同じことばが繰り返されている。／・もうけふおまへはわかれてしまふ／・ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ／一見似ているこの二句が、意味の上では大差なくとも、気持の上では大きな隔たりを持つ。『もうけふおまへはわかれてしまふ』は、この蕈菜の模様のちゃわんも見られなくなってしまうとし子の気持を思いやる嘆きである。『ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ』は、死別の厳しさを改めて自ら認識した詩句である。『ほんたうに』をつけて、同じことばを繰り返さなければいられなかったのは、『Ora Orade Shitori egumo』というとし子の認識の正しさを認めなければならなかったからである。」（「小沢俊郎　宮沢賢治論集　2 口語

詩研究」）

15あのとざされた病室の／くらいびやうぶや／かやのなかに　当時、肺炎や結核などの場合、安静と保温のため冬でもかやをつり、屏風でかこった。

●二九二ページ

2やさしくあをじろく燃えてゐる　「燃えてゐる」は熱を出し体全体が火照っている状態をいうが、それは命の炎ともいえる。「やさしく」は死を自然に受け入れているとし子の心持ちを感受したところからくる。

「あいつはちゃうどいまごろから／つめたい青銅（ブロンヅ）の病室で／透明薔薇（ばら）の火に燃される」（「恋と病熱」）。

6あんなおそろしいみだれたそらから／このうつくしい雪がきたのだ　暗い雲のたちこめる空と白い雪との鮮やかな対比、暗い空から純白の雪が来る、自然の摂理の不思議さを痛感している。

8うまれでくるたて…　「またひとにうまれてくるときは／こんなにじぶんのことばかりで／くるしまないやうにうまれてきます」という賢治の注がある。現世では若くして病にかかったことを悔やみ、もし来世で再び人に生まれたら、自分のことばかりで苦しむことのない人生を送りたいという意志を語った言葉。詩集印刷用原稿では、一旦ひらがなをローマ字表記にしたが、再度ひらがな表記とした。

13天上のアイスクリームになつて　賢治の所蔵本では「兜卒の天の食に変つて」と直されている。兜卒の天とは、衆生を済度する弥勒菩薩の住む所をいう。その天界の食料。日本女子大学在学中に発病したトシを看護し、父に病状報告をした手紙にアイスクリームが出てくる。「昨夜は体温も三十八度二分食慾無く渇き甚しき様には御座候へども元気変りなく医師より許可を得て、（寧ろ重湯の代りとして）アイスクリームを食し候」（大正八年一月六日）。

14おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに　「みんなの幸」への祈り。「注文の多い料理店」の序にも「わたくしは、これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。」とあるように、「おまへ」一人だけではなく、「みんな」へその祈りは向けられている。なお、詩集本文にも賢治の手入れ本にも「聖い資糧」に振り仮名は付けられていない。「聖い」は用語の意味から「きよい」と読める。「資糧」については、「しりょう」と読めるが、意味内容から「かて」という読みが当てられることも多い。

15わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ　「みんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」というジョバンニの心に通じる願いである。

鑑賞

「春と修羅」の序は「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／（あらゆる透明な幽霊の複合体）／風景やみんなといつしよに／せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です／（ひかりはたもち　その電燈は失はれ）」と書き始められている。

賢治は「春と修羅」を詩集とは呼ばず〈心象スケッチ〉としたが、この序からもなぜそのように呼んだのか、その原理が示されている。

生きている「わたくし」を現象とみなし、電燈の「青い照明」と捉えたのは、交流電燈が五十分の一秒、六十分の一秒の速さで点滅しているという科学的現象に基づいている。生命も生滅を繰り返しており、さらにその因果の現象は一身の有機体の内部にも起こっているのである。賢治は有限なこの身体（電燈）に、無限の光が明滅するというふうに考えていた。〈心象スケッチ〉とは、そのせわしく明滅する心象をそのままにスケッチしようとする試みであったのである。

トシの臨終を詠んだ「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」は、「春と修羅」の多くの詩の日付が、（　）で記されているのに対して、《　》となっている。この表記はスケッチしたものを、新たな構成と主題意識をもって、再生させたことを表していると杉浦静は推測している（「宮沢賢治　明滅する春と修羅」）。

「永訣の朝」のバックに繰り返し響いてくるのは、とし子の「（あめゆじゆとてちてけんじや）」という声である。庭先に立つ「わたくし」の脳裏に刻まれ、反芻されている。この妹の願いを「わたくし」は、確かに引き受ける。「おまへ」と「わたくし」の個にとらわれた枠から、個を含みこんだ「みんな」へと祈りは深められる。「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」の空から落ちた雨雪が促す宇宙感覚が、その祈りの深まりを促す。「わたしのけなげな」「わたしのやさしい」妹は、わたしはわたしで一人行きます、と決然といい、また自分のことばかりで苦しんだ、腑甲斐ない生を申し訳なく思ってさえいる。「わたしの……」というこだわりは、妹のほうにはすでにない。

妹は「雪のさいごのひとわん」を兄に頼み、「わたくし」は「ふたつのかけた陶椀」をもってみぞれの中に飛び出す。そして妹がたべる「このふたわんのゆき」に「わたくし」は祈る。「ふたわん」への固執は妹への兄のこだわりを表してもいようが、この「ふたわんのゆき」は「みんな」への通路となる。「おまへとみんなとに」という意識はそこから来る。「正しいねがひに燃えて／じぶんとひとと万象といつしよに　至上福祉にいたらうとする」宗教情操へ向けた思いなのである。

「松の針」では、「わたくしといつしよに行けとたのんでくれ」という願いを妹に呼びかけており、個へのこだわりから抜け出ているわけではない。「無声慟哭」では、修羅にある自分の確認と、葛藤する心をそのままみつめようとする、覚悟が記される。深い悲しみはそう簡単に制御したり解消されるものではない。この後、「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」「鈴谷平原」「噴火湾（ノクターン）」の挽歌群が続き、妹の死をどう了解したらよいか、

探索する心象スケッチとなる。

《ギルちやんまつさおになつてすわつてゐたよ》
《こおんなにして眼は大きくあいてたけど
ぼくたちのことはまるでみえないやうだつたよ》
（略）
《お日さまあんまり変に飴いろだつたわねえ》
《ギルちやんちつともぼくたちのことみないんだもの
ぼくほんたうにつらかつた》
《さつきおもだかのとこであんまりはしやいでいたねえ》
《どうしてギルちやんぼくたちのことみなかつたらう
忘れたらうかあんなにいつしよにあそんだのに》

この「青森挽歌」に突然、混線したかのように挿入される「ギルちやん」を巡る会話は、濃縮された悲しみが子供の語り口で伝えられる。この会話の深い味わいは、子供の語り口だからこそ実現できた、いわば賢治童話のエキスとでもいえるものである。この「ギルちやん」はとし子の幻像と考えられる。その幻像はこちらからただひたすら見えるが、あちらからはこちらが意識されていない。そして通信は、届かないのである。《みんなむかしからのきやうだいなのだから／けつしてひとりをいのつてはいけない》という信仰上の思いは「わたし」の念頭にある。そして「あいつがなくなつてからのあとのよつひる／わたしはただの一どたりと／あいつだけがいいとここに行けばいいと／さういのりはしなかつたとおもひます」と結末に記しているが、この強い自己抑制は、苦しい判断である。「みんなの幸」を求める方向は示されているが、「どこかにかくされたとし子」を思う気持ちを消せない。そういう賢治を包みいやすのが、イーハトヴの自然であった。

「ここは銀河の空間の太陽日本　陸中国の野原である」とは「農民芸術概論綱要」の一節だが、イーハトヴは、銀河という宇宙的な視野から捉えられた賢治の心象中の「ドリームランドとしての日本岩手県」であった。「春と修羅」の末尾の詩「冬と銀河ステーション」は街道のひのきから凍った雫が燦燦と降り、スペクトルの光満ち溢れる中、銀河軽便鉄道の汽車が進む風景がスケッチされている。地上も銀河の空間そのものとして含まれているのである。

「よだかの星」「グスコーブドリの伝記」「銀河鉄道の夜」等の作品には、「わたくしのすべてのさいはひ」をかけて願う「永訣の朝」に通じる祈りが読み取れる。「永訣の朝」の祈りは生涯続くほど深いものであった。

参考

・**「新校本　宮澤賢治全集　第二巻」筑摩書房　平七**

「松の針」

さつきのみぞれをとつてきた
あのきれいな松のえだだよ
おお　おまへはまるでとびつくやうに
そのみどりの葉にあつい頬をあてる
そんな植物性の青い針のなかに
はげしく頬を刺させることは
むさぼるやうにさへすることは

どんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ
おまへがあんなにねつに燃やされ
あせやいたみでもだえてゐるとき
わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた
（*あゝいい　さつぱりした
　まるで林のながさ来たよだ）
鳥のやうに栗鼠（りす）のやうに
おまへは林をしたつてゐた
どんなにわたくしがうらやましかつたらう
ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言つてくれ
おまへの頬の　けれども
なんといふけふのうつくしさよ
わたくしは緑のかやのうへにも
この新鮮な松のえだをおかう
いまに雫もおちるだらうし
そら
さはらかな
（ターペンティン）terpentine の匂もするだらう

（一九二二、一一、二七）

*ああいい　さつぱりした
　まるではやしのなかにきたやうだ

（注）terpentine　テレピン油。松材を水蒸気蒸留して得られる揮発性芳香の精油。

参考文献

❊教師用

「新文芸読本　宮沢賢治」山内修編　河出書房新社　平二
「宮沢賢治　プレオシン海岸からの報告」入沢康夫　筑摩書房　平三
「宮沢賢治　透明な軌道の上から」栗原敦　新宿書房　平四
「宮沢賢治　明滅する春と修羅」杉浦静　蒼丘書林　平五
「宮沢賢治　心象の宇宙論」大塚常樹　朝文社　平五
「宮沢賢治　幻想空間の構造」鈴木健司　蒼丘書林　平六
「宮沢賢治『春と修羅』論」奥山文幸　双文社出版　平九
「新宮沢賢治語彙辞典」原子朗　東京書籍　平十一
「言葉の流星群」池澤夏樹　角川書店　平十五
「宮沢賢治の文学と思想」秋枝美保　朝文社　平十六
「《宮沢賢治》のさらなる彼方を求めて」天沢退二郎　筑摩書房　平二十一
「宮澤賢治イーハトヴ学事典」天沢退二郎他編　弘文堂　平二十二
「宮沢賢治探究」上・下　栗原敦　蒼丘書林　令三

❊生徒用

「宮沢賢治大事典」渡部芳紀編　勉誠出版　平十九
「図説　宮澤賢治」天沢退二郎他編　筑摩書房　平二十三
「宮沢賢治の世界」吉本隆明　筑摩書房　平二十四

参考　人生の〈救い〉としての詩

作者

鮎川信夫

大正九（一九二〇）年～昭和六十一（一九八六）年。詩人・翻訳者・評論家。本名、上村隆一。東京市小石川区（現・文京区）に生まれる。父・上村藤若は啓蒙雑誌や書籍の刊行を手がける事業家で、郷里である福井県石徹白村（現・岐阜県郡上市白鳥町石徹白）の名士として、地縁共同体や農村の振興を標榜していた。東京に育ち都会の自由な空気を好んだ鮎川は、時に父親の出版業を手伝いながらも思想面での軋轢を感じつつ成長する。

昭和八年、淀橋区戸山小学校を卒業、早稲田中学に入学。中学時代には萩原朔太郎や生田春月の詩に耽溺するが、こうした抒情詩からの離脱は早かった。昭和十二年、早稲田第一高等学院に入学。この年、モダニズムの影響を受けて書いた詩が文芸誌『若草』の投稿欄に次々と採用・掲載される。これをきっかけに中桐雅夫や衣更着信ら同年代の若手詩人たちと知り合い、詩誌『LUNA』に参加。『LUNA』は後に『LE BAL』と誌名を変え、北村太郎や田村隆一、三好豊一郎らが加入。若い世代にふさわしい清新なモダニズムを追究する方向性を共有し、後に戦後詩を領導する「荒地」グループを形成する主要なメンバーがここに集まった。

昭和十四年、早稲田高等学院の仲間たちと同人誌『荒地』（第一次）を創刊。この『荒地』や『LE BAL』の仲間たちと、夜ごと新宿の繁華街で議論を交わし、文学的な自己形成をおこなった日々が、鮎川の生涯続く詩人としての原風景となる。また『新領土』や『文芸汎論』などにも詩を発表して地歩を固める一方で、時局に圧迫される詩壇の状況から、モダニズム詩の限界をも意識するようになる。

昭和十五年、早稲田大学英文科に入学。緊迫感を増す時代状況の中で、才気ある詩友のうち牧野虚太郎（病死）や森川義信（戦病死）らを失う。鮎川自身も昭和十七年に繰り上げ卒業となり入営、スマトラへ赴くが、昭和十九年、肺結核により病院船で帰国。父の郷里の石徹白で終戦を迎える。

昭和二十二年、旧『LE BAL』のメンバーを中心に第二次『荒地』を創刊。戦前・戦中にすでに磨かれていた詩的技術やT・S・エリオットなどヨーロッパ文学の素養に基づいて、現代文明社会の苦悩や絶望を打ち出す「荒地」の詩風は、一部では気取った観念的な詩という批判にさらされつつも大きな注目を集めた。なかでも鮎川は実作と同時に詩論においてもグループの支柱となり、時局に対して有力な抵抗ができず言語遊戯に堕した従来のモダニズムを批判、それを乗り越える新たな戦後詩の創出のための論陣を張った。

昭和二十八年、第五福竜丸被爆事件が起こると、全国の詩人たちが反戦反核を唱える中、鮎川はこうした集団的な主題の選択を

批判し大きな論争に発展する（「死の灰詩集論争」）。戦意高揚のための戦争詩を量産した年長世代が、そのままの方法論で反戦平和の詩を書くことを指弾した鮎川の主張は、戦後初期からの戦争責任追及と密接に関わっており、詩における社会的責任のあり方について一貫して問題提起し続けたと言えよう。

晩年にいたるまで国内外への政治的関心が高く、時事評論家としても活躍。コラムや評論のほか、エラリー・クイーンなど海外ミステリー小説の翻訳でも知られている。

出典

本文は「鮎川信夫著作集３」（思潮社　昭五十）によった。

初出は「詩と生活感情」、ジュニアそれいゆ臨時増刊『芸術入門』（ひまわり社　昭和三十）。初刊は鮎川信夫・疋田寛吉『抒情詩のためのノート』（ひまわり社　昭和三十二）、後にその増補新装版にあたる『日本の抒情詩』（思潮社　昭和四十三）に収録。その後、著者である鮎川の意向を交えてさらに再編集された形で「著作集」に収録。

解説

従来、鮎川信夫といえば戦中派世代の「遺言執行人」（鮎川の詩篇「死んだ男」の中の詩句）というイメージが強く、そのことが鮎川の評価を大きく左右してきた。戦死者を忘れまいとする態度が肯定的に評価され、詩が平和教材に活用されることもある一方で、日本人の戦友を悼み連帯しようとするあり方が、それ以外の他者を排除する「国民的友愛原理」であるとする観点からの批判（酒井直樹・坪井秀人「複数の「戦後」へと働きかける思考へ」『現代詩手帖』平十三・十一）も、現在まで根強く続いている。戦後、詩や詩論を通して直接的に戦争認識を表明した詩人であるだけに、論じ手の政治的立場によって評価が分かれやすく、教室での鑑賞および体系的な教材研究が難しくなりつつある詩人であると言えよう。

ただし鮎川が戦後の代表的詩人と呼ばれるのは、そうした直接的な戦争責任や戦争認識にかかわる文脈のみを根拠とするわけではない。殺伐たる現代社会を生きる人間にとって詩とは何か、という根本的な問いを、二度にわたる悲惨な世界大戦の文脈をふまえて考究し、詩論という形で幅広い読者に向けて発信したことも、また、後続の世代に大きな影響を与えた所以であった。

本教科書では、鮎川が若い世代の読者へ向けて書いたそうした詩論の中から、読者各人の生を支える詩への希望に関して述べた箇所を収録した。本文中で鮎川は、人間にとっての〈救い〉とは常に「瞬間的なもの」にすぎないと述べている。これさえあれば絶対的に救われる、と言えるような希望はこの世にはない、という冷徹な認識を示したうえで、人生に何度でも訪れる苦痛や困難を乗り越えて生き続けてほしい、という読者への真率なメッセージとなっている。

参考文献

鮎川に関わる参考文献は数多いが、本教材の趣旨に即して「解説」に述べたことと関わる基礎文献を挙げる。全般的な伝記的事項や書誌に関しては牟礼慶子「路上のたましい」（思潮社、平四）および「鮎川信夫からの贈りもの」（思潮社、平十五）が詳しい。九〇年代から二〇〇〇年代にかけて相次いだ鮎川批判に関しては、酒井直樹・坪井秀人「複数の「戦後」へと働きかける思考へ」（既出・「鑑賞」参照）のほか、絓秀実「詩的モダニティの舞台」（思潮社、平二）や野村喜和夫・城戸朱理編「討議戦後詩」（思潮社、平九）が代表的なものである。そうした動向を含め、鮎川評価の変遷と問題点に関しては、田口麻奈「〈空白〉の根底　鮎川信夫と日本戦後詩」（思潮社、平三十一）所収「序論――研究史・問題点・展望」を参照されたい。

生徒が手に取りやすい鮎川の詩篇・詩論に関しては、現代詩文庫「鮎川信夫詩集」・「続鮎川信夫詩集」・「続続鮎川信夫詩集」（いずれも思潮社、昭四十三・平六・平十）や、詩の森文庫「現代詩との出合い」（思潮社　平十八）などがある。

汲む

茨木のり子

作者

大正十五（一九二六）年～平成十八（二〇〇六）年。詩人。医者である父、宮崎洪、母、勝の長女として大阪に生まれた。本名三浦のり子。昭和十二（一九三七）年小学校五年生のとき、日中戦争が勃発。昭和十六年愛知県立西尾女学校三年生のとき、太平洋戦争が始まった。昭和十八年、帝国女子医学・薬学・理学専門学校（現、東邦大学）薬学部に入学する。昭和二十（一九四五）年八月十五日、学徒動員で就業していた世田谷区上馬の海軍療品廠で敗戦の放送を聞き、翌日、友人と東海道線を無賃乗車で、郷里の愛知県幡豆郡吉良町に戻った。昭和二十一年、読売新聞主催の第一回「戯曲」募集に応募し、「とほつみおやたち」が選外佳作となった。秋、薬学部を卒業し、薬剤師の資格を得たが、その資格を使用したことはない。戯曲の台詞の言葉に〈詩〉の欠如を感じ、本格的に詩を勉強する中で、金子光晴の詩に出会う。昭和二十四年に医師の三浦安信と結婚。昭和二十五年九月号の「詩学」に、投稿した「いさましい歌」が掲載された。昭和二十八年五月には同じ投稿者だった川崎洋らと「櫂」を創刊する。以後、水尾比呂志・谷川俊太郎・友竹辰・吉野弘・大岡信・中江俊夫・岸田衿子らが同人として参加した。昭和三十（一九五五）年第一詩集「対話」を刊行。「青春を戦争の渦中にあってすりへらさねばならなかった（しかもそれを痛切に自覚することさえなかった）若い女性の、くやしさと悔いと、それゆえの、未来への夢と願望とが、観念的な晦渋さのない言葉でさわやかにうたいあげられている。敗戦を契機にひらかれたはば広い社会意識と健康な批評精神が特徴」（エナジー小事典・「日本の詩人」）と評される。以後、「見えない配達夫」（昭和三十三年）、「鎮魂歌」（昭和四十年）、「人名詩集」（昭和四十六年）、「自分の感受性くらい」（昭和五十二年）、「寸志」（昭和五十七年）、「食卓に珈琲の匂い流れ」（平成四年）、「一本の茎の上に」（平成六年）、「倚りかからず」（平成十一年）を出版している。他に「詩のこころを読む」（昭和五十四年）、「ハングルへの旅」（昭和六十一年）などのエッセイや「韓国現代詩選」（平成二年）の注目すべき翻訳書も出している。

作者を解くカギ
「鑑賞」参照。

出典

本文は「茨木のり子詩集」（思潮社　昭和四十四）によった。「鎮魂歌」（昭和四十年一月）所収。初出は昭和三十七（一九六二）年一月「いずみ」第三号。「――Y・Y――」という献辞が付けられている。Y・Yは山本安英のイニシャル。この詩集につ

いては「あとがき」でひとを悼む歌が多かったため「鎮魂歌」と題したこと、妙な詩もまじり統一を欠いていることを断った上で、「日頃、一筋縄で締括られるような詩のかきかたはしたくない、かのシェクスピアのような多面性、百の魂を持ちたいという大それた願い」があったことを記している。

主題

人に対しても世の中に対しても初々しさが大切だ、という素敵な女の人の言葉が、人生の指針となり、とらえ方の原点ともなった。大人になった今もその言葉の意味を汲む。人生において決定的な言葉との出会いをこの詩はさりげなく提示している

構成

第一連　立ち居振る舞いの美しい発音の正確な素敵な女のひとの出会い
第二連　その女のひとがわたくしに言った言葉
第三連　その言葉を聞いたときのわたくしの衝撃
第四連　女のひとの言葉からわたくしが了解したこと。今もその意味を反芻していること

指導上の注意点

●二九四ページ

問 **「私の背のび」とは、どのようなことか。**

答 大人になることはすれっからしになることだと概念的に思い込んで、大人というものを安易に理解したつもりでいたこと。

補 「すれっからしになる」という「大人」についてのステレオタイプのイメージに従って、無理に大人びて振る舞おうとするのは、自意識の強い青春期にはありがちの態度であろう。それがどんなイメージかは、第四連の第一行「大人になっても」以下の内容から指摘できる。生徒自身の「大人」のイメージを問うことから始めてもよいであろう。

●二九五ページ

問 **なぜ、「私はどきんとした」のか。**

答 私が抱いていた大人に対する概念的な捉え方とは正反対の考えに衝撃を受けたから。

補 大人をすれっからしになることだという考えは、既に人を人とも思わなくなる傾向を示すものであることにも気付いたから。他者の「なにげない話」から決定的な人生の指針を得るというのは、むしろ聞き手の側の感受の力によるであろう。ひたむきに求める心があるから、それを重く受けとめ

語句の研究

●二九四ページ

2すれっからし　世間ずれして、厚かましく悪賢くなったこと。また、その人。すれからし、すりがらしともいう。

4立居振舞の美しい／発音の正確な／素敵な女のひと　山本安英のこと。山本安英は明治三十九（一九〇六）年、東京の神田に生まれた。築地小劇場の創立とともに研究生として入所、新劇草創期の数少ない女優として活躍した。戦前は新築地劇団に参加。戦後は木下順二の民話劇を上演し、特に昭和二十四（一九四九）年に初演した「夕鶴」のつうは、生涯の当たり役となり、「夕鶴」も戦後を代表する劇として評価された。昭和四十一（一九六六）年、山本安英の会を結成。朗読の研究にも力を注いだ。平成五（一九九三）年没。茨木のり子とは敗戦一、二年後に初めて出会ったという。茨木のり子の童話や詩、放送劇を朗読することで、交流があった。

7私の背のび　無理に高く見せようとする動作。大人びた考えをしようとしていたことを言う。

9初々しさが大切なの　「初々しさ」とは、初心の状態で、物慣れず新鮮な感覚をすべてのものに向けている状態。

●二九五ページ

1人を人とも思わなくなったとき　傲岸不遜に人を物のように見下して、相手の気持ちを考慮に入れなくなったとき。自分は偉いのだという思い上がった状態。

2堕落　精神的な向上心を失い、落ちぶれること。仏教では道心を失い、悪道に落ちることを言う。

3隠そうとしても　隠せなくなった人　表面的にとりつくろっても、堕落した思いがおのずから言動に現れてしまうこと。

6どぎまぎ　不意打ちを食ったり、威圧されたりして、うろたえ慌てる様。

7ぎごちない挨拶　緊張のあまり挨拶の言葉がうまく出てこず、うろたえている様子。「ぎごちない」は、動作がぎくしゃくしてなめらかでない様。

7赤くなる　緊張のあまり顔が赤くなる

8失語症　発声器官や聴覚に障害がないにもかかわらず、言葉の使用や理解ができない病的状態を言うが、ここでは緊張のあまり言葉が出てこない状態になること。

ることができた。この詩は作者の自己確認の歌ということができよう。

問 **「それらを鍛える必要は少しもなかったのだな」という「それら」とは、どういうことを指しているか。**

答 ぎごちない挨拶をしたり、醜く赤くなったり、言葉がスムーズにでないでどぎまぎすること。そして子供の悪態にさえ傷つく敏感な感受性をいう。

補 「私」がこれまで恥じていた未熟さの具体例を列挙している箇所のため、生徒自身の似たような認識・経験について問うきっかけにもなるだろう。

●二九六ページ

問 **◉「震える弱いアンテナが隠されている」とは、どういうことか。**

答 いい仕事の核には分かったつもりになって臨むのではなく、常に初々しい敏感な感性をもって物事に取り組む姿勢があるということ。

補 第二連で、初々しさを失って堕ちてゆく人間の多さが語られていることから、この「アンテナ」は気をつけていないと作動しなくなる貴重なものでもあるだろう。

9悪態　悪口。悪たれ口。

10生牡蠣のような感受性　牡蠣殻から取り出された柔らかな傷つきやすい剥き身の例示。

12年老いても咲きたての薔薇　年老いた薔薇の木にも咲き出す花は常に生まれたばかりの初々しさがあるということ。

●二九六ページ

3震える弱いアンテナ　「アンテナ」は無線通信、携帯電話、ラジオ、テレビ等で電磁波を送信したり受信したりする装置。些細なものでも繊細に感じ取る感性の裏づけがあるということ。

鑑賞

詩「汲む」は、人生においてその後の方向を左右するような人との出会い、言葉との出会いが書かれている。

詩「汲む」において、茨木のり子から献辞を受けた山本安英は、「汲む」という詩にどのような気持ちを抱いているかを、「茨木のり子さんのこと」という文に記している。

あの時期（注、敗戦後一二年経った頃）は、演劇のいちばん本質的な問題が、みんなで論じ合われていて、俳優として、歴史や科学の勉強の第一歩から、人間の再創造までをつかみとろうと夢中になっていたのだと思います。茨木さんの『汲む』という詩には、「Y・Yに―」という副題がついていて、そのころ私が演劇の話をしながら、ふっと口にしたことばを詩のなかに定着させてくださったのです。私のつたない話を、茨木さんはことごとく、人間の生き方の問題として深く受けとめてくださったということを感謝したい気持ちなのです。

また、「端麗というのでしょうか、ひたむきに求めるこころが表情にあらわれていて、そういう深いところからくる美しさ」を山本は茨木のり子に見たともいう。

一方、茨木のり子のほうでも、山本安英について「新劇女優の山本安英さんから一度会いたいというお手紙を頂き、まだ『夕鶴』が生まれる前の山本さんにお目にかかり、それからずっとおつきあいが続いているが『女の生きかた』の一番大切なところを、私は山本さんから学び吸収しようとしてきたような気がする。」（「はたちが敗戦」）と書いている。

親愛の情あふれる交流と言ってよいだろうが、むろんそこには安易な妥協はなかったと思われる。次の山本安英の言葉がそのことを示している。

茨木さんはよく、私を、生きる指針にしていると言われる。茨木さんらしい、やさしい、ひとつの励ましのことばだと思っていますが、ほんとうにそんなふうに思ってくださっていたら、それはこわいことです。もし私がまちがったとしたら、いちばん怒るのは彼女でしょう。こわさというよりも刺戟というか、そういう関係をつきつけてくれている。

茨木のり子さんは、あまりにも、ちゃんと生きていこうとする人である、ということを私はどうしても言いたくなってしまうのです。

「汲む」に出てくる山本安英の言葉は、茨木のり子に対して述べられたものではなかったという。だが、その言葉を茨木は「わたしは自分への大事な言葉のように受けとめたんです」という。茨木のり子自身が、このような言葉を求めていたのだ、とも言えよう。

舞台女優の山本安英は「ある時、ある舞台で咲かせた花は、瞬間に消え去って、何ひとつ跡をとどめるものがない。いつも〝これから〟を求めていくより仕方がありません。」と演技するものの覚悟を語っている。その〝これから〟を求めていく姿勢は、「初々しさが大切なの」という言葉にストレートにつながっている。「Y・Y」女の「なにげない話」から少女時代の作者が汲んで自分に課しているのは、「震える弱いアンテナ」を失わずに「いい仕事」をすること。「柔らかく」そして「外にむかってひら

かれる」ことである。「柔らか」いからこそ〝これから〟を求めて「外にむかってひらかれる」のである。

「Y・Y」のモデルである山本安英が舞台俳優であったことを考えると、「立居振舞の美しい」「発音の正確な」とは、まずは日常的に訓練を積んでいるゆえの所作の美しさ、発声の正しさを指すものと理解できる。詩編のみを鑑賞する場合、やや誤解を招きかねない表現ではあるが、表層的な礼儀作法や、特定の言語の運用能力をもって「素敵な女のひと」と述べられているわけではないことには注意しておきたい。これらの表現が、ある特定の文化的コードにおいて洗練されていることを指すと解釈してしまうと、この女性は世慣れなさや初々しさとは正反対のものを体現していることになり、全体の趣旨にも矛盾が生じる。型通りの品行方正さではなく、内面の謙虚さや周囲への礼節が滲み出るようなあり方として捉えたい。

参考文献

「茨木のり子詩集　現代詩文庫20」　思潮社　昭和四十四
「現代の詩と詩人」　中村稔他編　有斐閣　昭和四十九
「現代の詩人7　茨木のり子」　川崎洋鑑賞　中央公論社　昭和五十八
「月刊国語教育」　心にふれる現代詩　平成四年一月号　東京法令出版
「国文学」現代詩を読むための研究事典　平成四年三月号　学燈社
「増補　茨木のり子〈花神ブックス1〉」　花神社　平成八
「日本名詩集成」　学燈社　平成八
「新研究資料現代日本文学7　詩」　明治書院　平成十二

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **室生犀星「小景異情」（二八六～二八七ページ）において、「ふるさと」と「みやこ」はどのような関係にあるか、作者の生きた時代なども参考にして話し合ってみよう。**

【答】 それぞれ異なる生活感覚や文化があり、空間的にも心情的にも簡単に行き来することができない、相反する要素を帯びた関係にある。

▼ポイント▲ 当時、東京と各地方の間には、生活規範や人間関係のあり方を含めさまざまな点で著しい差異があった。現代と比べて、空間的にも心理的にもその隔たりが大きかったことにも注意を向けてみたい。犀星の場合、「ふるさと」が古都・金沢であることが「みやこ（都）」の意味付けに複雑な陰影をもたらしているものの（「鑑賞」参照）、教室での鑑賞においては、詩人の生きていく「みやこ（都）」と「ふるさと」が相容れない場所であることが重要となろう。

2 **萩原朔太郎「およぐひと」（二八八ページ）では、全体的に平仮名表記が多用されているが、それがどのような効果をもたらしているか、考えてみよう。**

【答】 柔らかい流線形の平仮名を多用することで、水の中で泳ぐ身体のイメージが喚起されやすくなっている。

▼ポイント▲ 「心臓（こころ）」や「瞳（め）」などの表記が印象的に使われている詩篇だが、それ以外の大部分が平仮名で表記されていることも、その詩的効果に大きく寄与している。平仮名で示された部分が地の役割を担うことによって、漢字で表記された具体的な器官や月の像が図として浮かび上がってくるのである。

3 **宮沢賢治「永訣の朝」（二八九～二九二ページ）において、「いもうと」への思いと「みぞれ」や「雪」との描写は、どのように関連しているか、まとめてみよう。**

【答】 詩篇前半においては、「みぞれ」は空を「へんにあかる」くしており、その異様な天候は「いつさう陰惨」である。「蒼鉛いろの暗い雲」から「びちよびちよ沈んでくる」とあるように、「みぞれ」は「いもうと」の死を前にした「わたくし」の心情と同じく、暗く重苦しいものとして描写されている。しかしながら、「いもうと」の頼みによって「雪」を椀に集めた「わたくし」は、「このうつくしい雪」が「みぞれ」と同じ「おそろしいみだれたそら」から降ってきたことに気がつき、その清らかさ、美しさに

導かれて、「いもうと」や他の人々のために祈る気持ちになる。

つまり、「みぞれ」の描写は「いもうと」との別れに悲しみ乱れる心情、「雪」の描写はその悲しみを超えて、「いもうと」を含めた多くの人々のために祈ろうとする心情と関連している。

▼ポイント▲　「わたくし」の心情の転換点は、雨雪をとってきてくれという「いもうと」の頼みが、自分自身のためではなく、「わたくし」を「いつしやうあかるくするため」であったと気づくところにある。来世では「わりやのごとばかり」考えず、利他的に生きたいとする「いもうと」の願いの象徴が「雪」であり、「わたくし」はその美しい思いを受け止めている。「みぞれ」と「雪」の描写のなかには、個人的な悲哀から、より広く深い他者への思いへの転換が含まれていることを確認したい。

4　**茨木のり子「汲む」（二九四〜二九六ページ）において、「大人になる」ことと「初々しさ」とはどのような関係にあるか、作者の考えの変化を中心にまとめてみよう。**

【答】　当初は、世慣れない態度や傷つきやすさ、頼りなさを単に未熟な状態と捉えており、「大人になる」ために否定的に克服しようとしていたが、それらが大切な「初々しさ」でもあることに気づかされてからは、むしろ、精神的に堕落していない「大人」になるために必要なものと思うようになった。従って、「大人になる」ことと「初々しさ」とは、当初は二者択一的な関係であり、前者を選ぶべきものと捉えられていたが、女性との出会い以降は、難しいが両立させるべきものとして捉えられている。

▼ポイント▲　女性との出会いの前後では、「私」にとっての「大人」の像が変わっていることに注意したい。冒頭で述べられる「大人」は「私」にとって目指すべき具体像を伴わない概念であるため、世間知を積んで動じなくなった人間としてしかイメージされないが、個別具体の「素敵な女のひと」とその言葉に触れて以降は、堕落を拒み、「いい仕事」にも連なるような「大人」を目指すようになっている。それまで考えていたような「大人」にならないために、「初々しさ」を保つことこそ「難しい」という認識の転換が起こっているわけだが、それが実に難しいからこそ、「私」は後年になっても、「かつてのあの人」の言葉にたちかえり、何度もその意味を「汲む」必要があるのだということを理解したい。

5　**詩の中で用いられている比喩や反復などの表現技法を抜き出し、それらが、それぞれの作品の文脈の中で、どのような効果を持つか、考えてみよう。**

【答】

［小景異情］…「遠きみやこにかへらばや／遠きみやこにかへらばや」（二八七ページ）

本当は涙が出るほど故郷が恋しいのだが、その心情を抱えながらもやはり都（東京）に帰ろう、都（東京）しか帰るところはないのだ、というこの詩編の主題を反復によって強調している。

［およぐひと］…「およぐひとのからだは」「およぐひとの心臓は」「およぐひとの瞳は」「およぐひとのたましひは」（二八八ページ）

「およぐひとの～は…」と主部を反復することで、述部がそれぞれ際立つ効果がある。また、同じ平仮名が連なることによって、視覚的にも柔らかい水中のイメージが喚起されやすくなっている。

［永訣の朝］…「（あめゆじゆとてちてけんじや）」（二八九・二九〇ページ）

雨雪をとってきてくれ、という「いもうと」の言葉が「わたくし」の心の中で重層的な意味合いを帯びてくる様子が、四度の反復によって効果的に表されている。最初、熱に苦しむ「いもうと」のためと思って外に飛び出してゆく場面では、「わたくし」にとってこの言葉は兄を頼るかよわい者の願いとして響いている。兄妹として一緒に育ってきた間、「いもうと」はこれまでもこのような言葉で「わたくし」を頼ってきたであろうことも、この言葉を何度も反芻する「わたくし」の様子から想像される。しかし、「いもうと」は単に兄を頼ったのではなく励まそうとしたのだと「わたくし」が気がついたことで、最後の「（あめゆじゆとてちてけんじや）」は、「ありがたう」「わたくしもまつすぐすすんでいくから」という感謝の念と向き合うようにして反復されており、崇高な希望の言葉に変化しているのである。

［汲む］…「頼りない生牡蠣のような」「年老いても咲きたての薔薇」（二九五ページ）

「頼りない生牡蠣のような」は直喩、「咲きたての薔薇」は隠喩であるが、いずれも心のありようの比喩であり、これら身近な具象の質感や形態を想起させることで、柔らかさや傷つきやすさを具体的かつ印象的に表現している。

▼ポイント▲　反復や比喩は詩の最も基本的な技法であり、多くの作品において、主題と密接に関連している。四篇の中で「汲む」についてのみ反復法が使われていないが、それはこの詩が日常のささやかな気づきを主題としており、感情をたかぶらせ揺さぶるような反復の技法とは折り合わないからである。「小景異情」と「永訣の朝」に関しては、郷愁や死別に関わる大きな情動を主題としているゆえに、各詩篇の感情の核となる部分で効果的に詩句が反復されている。また「およぐひと」に関しては、日常感覚から逸脱した強度あるイメージを表出するため、感情の強調ではなく視覚的効果に寄与する反復がおこなわれており、これも一篇の主題と密接に関わっている。

言葉と表現の解答例

1 **「涙ぐむ」（二八六・7）の接尾語「ぐむ」には、どのような意味と働きがあるか、調べてみよう。**

【答】（四段型活用）名詞に付いて動詞を作る接尾語。何らかのきざしが現れてくること。

2 **動詞「汲む」（二九六・7）について、詩の中で使われているのと同じ意味での使い方になるよう、短文を作ってみよう。**

【例】
・どうか私の真意を汲んでほしい。
・事情を汲んで、彼の責任は追及しないことにした。

（阿毛久芳・山本康治・田口麻奈）